小・中学校

# 東京都道徳教育読み物資料集

平成23年3月

東京都教育委員会

小・中学校

# 東京都道徳教育読み物資料集

平成23年3月

東京都教育委員会

# はじめに

東京都教育委員会は、平成十一年度から区市町村教育委員会と連携して、「道徳授業地区公開講座」を実施してまいりました。この公開講座の趣旨は、次のとおりです。

①意見交換を通して、学校・家庭・地域社会が一体となった道徳教育を推進する。

②道徳の授業の質を高め、道徳の時間の活性化を図る。

③道徳の授業を公開することにより、開かれた学校教育を推進する。

この公開講座は、平成十四年度からは都内全ての公立小・中学校で実施され、現在では都内全ての公立中高一貫教育校や特別支援学校においても実施されております。また、平成十五年度からは公開講座の一層の充実を図ることを目的とした推進委員会を設置しました。

このように、東京都教育委員会は今日まで、家庭や地域社会と一体となって推進する心の教育の普及に努めてまいりました。

本資料集は、都内公立小・中学校等において充実した道徳教育を推進することで、全ての児童・生徒が、人間としての在り方を自覚し、人生をよりよく生きるための基盤となる道徳性を身に付け、豊かで強い心を育むことを目的として作成しました。

作成に当たっては、東京都教育委員会の教育目標に基づき、学習指導要領の道徳に示された内容項目のうち、「思いやり」「規範意識」「勤労・奉仕」「個性伸長」「生命尊重」を中心に、東京を象徴するような行事や自然、施設、そして連綿と受け継がれてきた文化や伝統、さらには東京に暮らす人たちの営みなどを素材として取り上げ、児童・生徒にとって魅力ある読み物資料をその活用例とともに編集したものです。

各学校におかれましては、本資料集を活用し、道徳の時間の一層の充実が図られますよう期待しております。

終わりになりますが、本資料集の編集に当たられた道徳授業地区公開講座推進委員会の皆様、資料提供をしてくださいました関係者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

平成二十三年三月

東京都教育庁指導部長

高　野　敬　三

はじめに

第一章　読み物資料

小学校低学年用

一　つながるいのち……2
二　わたしが　もちます……8
三　はくぶつかんで……12

小学校中学年用

一　ライオンの赤ちゃん　ハナ……16
二　電車でのできごと……20
三　山のマナー……24

小学校高学年用

一　和也らしい花……28
二　ペットの行方……34
三　東京マラソンのボランティア……38
四　気をつけるのよ……44

中学校用

一　江戸切子への道……50
二　誰のために……56
三　土器のかけら……60
四　お父さんの思い……64

## 第二章　読み物資料の活用


小学校低学年用

一　つながるいのち　3―(1)……72

二　わたしが　もちます　2―(2)……73

三　はくぶつかんで　4―(1)……74

小学校中学年用

一　ライオンの赤ちゃん　ハナ　3―(1)……75

二　電車でのできごと　2―(2)……76

三　山のマナー　4―(1)……77

小学校高学年用

一　和也らしい花　1―(6)……78

二　ペットの行方　4―(1)……79

三　東京マラソンのボランティア　4―(4)……80

四　気をつけるのよ　3―(1)……81

中学校用

一　江戸切子への道　4―(5)……82

二　誰のために……　4―(1)……83

三　土器のかけら　1―(5)……84

四　お父さんの思い　3―(1)……85

# 第一章　読み物資料

つながるいのち

きょうは、お父さんの　ふるさとの　おじいちゃんと
おばあちゃんの　家に　あそびに行く日。
いとこの　みんなや　おじさん、おばさんたちも　来て
いた。

おじいちゃんと　おばあちゃんの　家の中では、おに
ごっこや　かくれんぼが　できる。
きょうも、さっそく　いとこの　みんなと　かくれんぼ
を　することにした。

ぼくは、どのへやに　かくれようか　こっそりと　ある
いていた。
（そうだ、ここの　へやにしよう。）

ぼくが　入った　へやには、むかしの人の　しゃしんが
たくさん　かざられていた。
（そうか、ここは　おじいちゃんや　おばあちゃんより
もっと　むかしの人の　しゃしんが　かざられている
へやなんだ……。）
と思った。

おしいれに　かくれようと　したときに、はしらに　し
るしが　あることに　気がついた。

ひろゆき七さい　たけや七さい　ひろゆき八さい……。

（ひろゆきって、お父さんのこと？　たけやって、お父さ
んの　弟の　たけやおじさんのことかなあ。）

「おばあちゃん、このはしらの　しるしは　なあに？」
かくれんぼが　おわってから、おばあちゃんに　聞いてみた。
「これはね、お父さんと　おじさんが　子どものころのせの高さの　しるしよ。」
いとこの　みんなも　あつまってきた。
「おもしろいなあ。たけやって　父ちゃんのことかあ。」
よく見ると、おじいちゃんや　知らない人の　名前もうすく　書かれていた。
おばあちゃんが、
「そういえば　おじいちゃんが　子どものころの　しるしも　ここにあったわね。」
と、なつかしそうに　はしらを　見はじめた。
ぼくも　はしらにむかって、せを　くらべてみた。

（お父さんが　七さいの　ときは、このくらい　だったのかあ。ぼくの方が　ちょっと　高いな。）

ぼくの　お父さん、おじいちゃん……。そのまた　お父さん、おじいちゃん……。みんなが　生きてきたしるし。なんだか、ふしぎな気もちになった。

「うわあ、なつかしいなあ。」

お父さんも　へやに　入ってきて、はしらの　しるしをさわりはじめた。

「ようし、なかま入りしよう。そのまま　そのまま。」

お父さんが、ぼくの　頭の　高さに　手を当てて、はしらに　ぼくの　名前を　書いて、しるしを　つけてくれた。

「ぼくも。」

「わたしも。」

いとこの　みんなも　うらやましそうに　言い出した。
ぼくは　はしらの　じぶんの　しるしを　見て　にっこりした。

（山西　香織　作）

わたしが　もちます

きょうは、学校の　近くにすむ　おじいさんや　おばあさんたちを　おむかえして、いっしょに　きゅう食を　食べる日です。　さやかたちは、きょうのために　手紙や　歌の　じゅんびを　してきました。

「どんな人が　来るのかな。」

楽しみな　気もちと、心ぱいな　気もちとで、どきどきします。

時間になると、みなさんが　少しずつ教室に　やってきました。　一人一人が　ざせきに　あんないされて　います。

さやかの前にも、上田さんという　つえをついた　おばあさんが　ゆっくりと　すわりました。

食じはすすみますが、さやかは　上田さんに　なかなか話しかけることが　できません。

（どんなことを　話そうかな。）

さやかは　上田さんを　見ました。すると、上田さんが、

「おかわりを　したらどう。」

と、話しかけて　くれました。

「はい。いただきます。」

さやかは、どきどきしながら　へんじを　しました。

それから、たくさん　話を　しているうちに、上田さんが　さやかと同じ　アパートに　すんでいることが　分かりました。

（そういえば、会ったことが　あるかもしれない。）

さやかは、アパートで　上田さんに　また会うことが楽しみに　なりました。

つぎの週の　ある朝。さやかが　学校へ　行こうと　アパートの　かいだんを　下りていくと、上田さんが　おどりばに　いました。つえを　つきながら　ごみぶくろを　もっていて、たいへんそうです。

「おはようございます。」

さやかが　あいさつをすると、上田さんも、

「あら、この間は　ありがとう。いっしょに　きゅう食を　食べて　楽しかったわ。」

と、あいさつを　かえして　くれました。

「上田さん、ごみすてですか。」

と、さやかが聞くと　上田さんは　こまった顔をして、

「そうなのよ。」

と言って、うなずきました。

（どうしよう。）

さやかは　まよいました。

さやかは　しばらく　考えましたが、
「ごみぶくろを　わたしが　もちます。」
と言って、上田さんの　ごみぶくろを　うけとりました。
上田さんは、とても　うれしそうな顔で何ども　おれいを　言ってくれました。
この日は、一日中、さやかは　はればれとした　気もちですごしました。
（そうだ、つぎのときも　「わたしが　もちます。」って　言おう。）
さやかは、上田さんに　会うのが　ますます　楽しみになりました。

（茂呂　佳江　作）

はくぶつかんで

夏休みの　ある日のこと。

けんじは、お母さんと　はくぶつかんへ　出かけました。

大すきな　きょうりゅうの　ほねや　かせきを　見るためです。

入り口の先に、大きな　*ティラノサウルスの　ほねがかざってあるのが　見えました。

「うわあ。」

けんじは、近くで　見たくて　走り出しました。とちゅうで、何人かの人に　ぶつかってしまいましたが、気になりません。

「お母さん、早く　早く。すごいよ。」

お母さんにも　見てほしくて、大きな声で　よびました。

*ティラノサウルス　きょうりゅうのしゅるいのひとつ。

お母さんは、けんじが　ぶつかった人に　あやまりながら、けんじのそばに来て　言いました。

「けんじ。ここには　たくさんの人が　来ているのよ。きまりは　まもらなきゃ。」

小さな　声でしたが、とても　こわい顔を　しています。

「だって……。」

けんじは　口を　とがらせました。

そのときでした。

「すごい　すごい。お父さん、見て　見て。」

そう言って　走って来た　小さな　男の子が、けんじのうでに　ぶつかりました。

男の子は、ぶつかっても　ぜんぜん　知らんぷりです。

けんじは、男の子を　じっと見つめました。

＊トリケラトプス　きょうりゅうのしゅるいのひとつ。

やじるしにそって　歩いて行くと、＊トリケラトプスのほねが　かざってあるのが　見えました。ゆっくり　近づくと、まわりに　ロープが　はってありました。となりで　見ている　女の子が、手を　のばして　しっぽを　さわろうとしています。けんじも　さわりたくて、手を　のばしたそのとき、赤で書かれた字に　気がつきました。

**さわっては　いけません。**

「……。」

けんじは　手を　下ろしました。

帰り道、けんじは　お母さんに　がまんしたことを　つ

たえました。

「えらかったわね。」

お母さんは、けんじの　頭（あたま）を　なでながら　にっこりわらいました。

そして、けんじは、え顔で　こたえました。

「だって、きまりは　まもらないとね。」

（茂呂　佳江　作）

# ライオンの赤ちゃん　ハナ

東京のとある動物園で、四頭のライオンが生まれました。四頭はすくすくと成長し、三か月がたちました。

このころになると、大人のライオンたちといっしょのライオン園での生活が始まります。ライオン園での生活が始まった、ある日のことです。とつぜん大人同士のけんかが始まり、ハナは、そのけんかにまきこまれてしまいました。

けんかがおさまったとき、ハナは、後ろ足の付け根から血を流してうずくまっていました。おどろいた飼育員の山川さんはハナをだいて、獣医さんの所に行きました。

ハナのけがはことのほか重く、ほねが折れていました。さっそく手術をしましたが、元通りに歩けるようになるのか分かりませんでした。

（こんなじょうたいでは、ハナは思うように歩けなくなってしまう。ほかのライオンといっしょには、くらせないかもしれない。）

山川さんは気が重くなりました。

ハナは毎日毎日、動かない足を引きずりながら、もがいていました。

ある日、きょうだいたちが遊んでいるときに、遠くからさびしそうにその様子をながめているハナのすがたがありました。そして、立っては転び、転んでは立つということをくり返しながら、きょうだいたちのいる所へ行こうとしていました。

（もう、思うように歩くことはできないだろう。）

と、山川さんは、心をいためていました。

それから、何日もたったある日のことでした。山川さんがハナを見つめていると、ハナが、よろよろしながらゆっくりと立ち上がりました。すると今度はけがをした足を引きずるようにして、ふんばって足を前に出そうとしましたが、ハナはドスンと転んでしまいました。

しかし、また立ち上がって足を前に出そうとしています。足が思うように動くためには、ほねの周りのきん肉が強くならなくてはなりません。

山川さんは、そのすがたを何日も何日も見守りました。

けがをしてから数か月。ついにハナは自分の足で立って歩けるようになりました。なんと、ハナの足のきん肉は、立っては転ぶことをくり返しながら強くなっていたのです。

その様子を山川さんは、ほほえみながら見つめていました。

ハナは、まだ足を引きずるものの、ライオン園でくらせるほどに回復しました。

ハナは大けがに打ち勝ったのです。

（ハナを見守ってきてよかった……。）

山川さんは、今日もハナを見つめています。

今も、ハナの足は完全に治ったわけではありません。これから体が大きくなるので足のほねがどうなるのかは分かりません。でも、ハナは今、ライオン園で元気にくらしています。

（安倍　威　作）

# 電車でのできごと

駅のホームに電車がすべりこんで来た。まさとは黄色の線まで下がり、頭上にかかげられている案内の表示を見上げた。

「東京行き……。」

（まちがいない。）

まさとは都内の小学校に通う小学四年生。今日は中野に住んでいるおばあちゃんの家に行く。おばあちゃんに旅行のおみやげをとどけるよう、お母さんからたのまれたからだ。おばあちゃんの家に行くには電車に乗らなくてはいけない。お母さんといっしょに何回か行ったことがあるが、一人で行ったことはない。お母さんからたのまれた時は心がゆれた。でも、

「もう四年生なんだから……。」

というお母さんの言葉がまさとのせ中をおした。

電車が速度を落として静かに止まった。ドアが開くと同時にたくさんの人がおりてきた。まさとはまだ人がすべておりないうちにドアの横から体を入れ、ドア近くの手すりのある場所に立った。ここは外の景色がよく見えるため、乗りすごす心配がない。前に、お母さんといっしょの時もこの場所にいた。まさとはほっとひと安心した。

まさとがおりる一つ前の駅で、まさとの立っている側のドアが開いた。乗る人は少しいたが、おりる人はいないようだった。ドアがそろそろしまりそうな時に

「おりますよ。ごめんなさいね。」

という言葉が聞こえ、まさとがせおっていたリュックサックがぐいぐいおされた。

（ぼくは、ここでおりるんじゃない。ぜったいに、動かないぞ。）

まさとは手すりにつかまりふんばったが、電車からおし出されてしまった。おじさんが持っていた大きな荷物がリュックサックに引っかかったのだ。おじさんが申しわけなさそうな顔をしてペコンと頭を下げた。まさとは急いで電車にもどった。すぐにドアはしまり、電車が

動き出した。後ろに遠ざかっていくおじさんをじっと見ながらまさとはため息をついた。

まさとは、無事におばあちゃんにおみやげをとどけた。おばあちゃんはとても喜び、ごほうびにまさとの好きなおかしをたくさんくれた。まさとはうきうきした気持ちでおばあちゃんの家を後にした。

駅のホームは人であふれていた。ちょうど、つとめ帰りの人が乗る時間と重なってしまったのだ。まさとは行きの電車と同じようにドア付近の場所に立とうとしたが、後から乗ってきた大ぜいの人におされて、おりるドアの反対側におしこめられてしまった。つかむところもなく、電車がゆれるたびにたおれそうになった。周りの人のせが高くて外が見えない。今どこを走っているのか、車内アナウンスだけがたよりだった。

ようやくおりる駅に着くようだ。電車が速度を落として停車し、ドアが開く音がした。しかし、人の動きがない。ドアを目指して人をおしのけていくが、まだ先が長い。

（大変（たいへん）だ、このままではドアがしまってしまう。）

思わず声が出た。

「すみません、おります。」

そのしゅん間、まさとの前に道ができた。前にいた人たちが一回おりて道を開けてくれたのだ。

まさとがおりた後、道をつくってくれた人たちは何事（なにごと）もなかったかのように電車にもどり、ドアがしまった。

（電車からおりることができてよかった。）

まさとは大きなため息をついた。そしてゆっくりと走り出した電車を見ながら、行きの電車でのできごとを思い起（お）こしていた。

（武田　淳　作）

# 山のマナー

夏休みに、ぼくがお父さんと高尾山（たかおさん）に行ったときのことです。山ちょうでおべん当を食べたとき、ごみをすてようとごみ箱（ばこ）をさがしました。しかし、どこを見てもごみ箱はありません。ぼくはお父さんに、

「ごみ箱はどこにあるの。」

と聞いてみると、お父さんは、

「山にはごみ箱はないよ。ごみは持（も）って帰るんだよ。それが山でのマナーだよ。」

と教えてくれました。

「えっ。家まで持って帰るの。」

するとお父さんは、

「そういえば、お父さんが小学生のときに遠足でここに来たときにはごみ箱があったような気がするな。ちょっと聞いてみようか。」

と言いました。そして、お父さんといっしょに、山ちょうにある＊ビジターセンターへ行って聞いてみることにしました。係（かかり）の人は高尾山の

＊ビジターセンター　あんないやかんさつの手助けをする場所。

本を持ってきて話してくれました。

それは四十年くらい前のことだそうです。

高尾山のふもとに駅ができてから、高尾山には多くの人々が登るようになりました。当時は、休けいできる所や山ちょうには、お客さんが気持ちよく登れるようにと、いくつもごみ箱がありました。日曜日や休日などは、とくにたくさんの人々が登るため、次の日はたくさんのごみがごみ箱からあふれるほどでした。

ケーブルカーのしょく員や茶店の人など、高尾山で働く人たちが、ごみの回しゅう作業をしてもきりがないほど、たくさんのごみがすてられていました。

また、ごみがふえたことで、高尾山にはカラスやハトがたくさん住みつき、それまで住んでいた鳥たちがにげて行ってしまいました。

そこで、高尾山で働く人たちは、ごみをへらすための話し合いをしました。その結果、ごみ箱をなくし、お客さんにごみを持ち帰るようによびかけることになりました。

はじめのうちは、
「ごみがすてられなくて不便だ。」
と言っていた人たちもいましたが、時がたつにつれてごみを勝手にすてる人がへり、山がきれいになってきたそうです。
係の人は最後に、
「しかし、完全にごみがなくなったわけではないので、たまにボランティアの人たちが集まって、高尾山のごみ拾いをしてくれています。」
と、付け加えました。

山を下りるとき、ぼくは休けいできる所で、ポケットからタオルを取り出し、あせをふきました。そのときぽろっと、あめが入っていたふくろが落ちました。いつもだったら何気なく拾っていましたが今日はちがいます。
（おっと。山をよごしちゃいけない。）
と、さっきの係の人の話を思い出しながら拾いました。

（安倍　威　作）

# 和也らしい花

東京。あみの目のように張りめぐらされた鉄道。朝夕は家、仕事場、学校と、たくさんの人々を運び、日中は仕事や用事で都内をかけ回る人々を運ぶ。その鉄道の仕事をしている人の少年のころの話である。

「今週の目標は、『休み時間は外で元気よく遊ぼう』ですよ。みんな、校庭に出なさい。ほら、和也くんも。」

先生に言われて、和也は校庭に出た。クラスのみんなはドッジボールをしようと、チーム分けをしていた。

すると、係の仕事を終えて校庭に出てきた健ちゃんが、

「和也くんも、いっしょにやろうよ。」

と声をかけ、和也の手を引っ張ってみんなのもとへ連れて行った。

「ぼくたちも入れて。」

二人は同じチームになった。

いよいよ、ドッジボールが始まった。和也は、ボールを取ろうとするが、あと一歩のところで、ボールにさわれない。健ちゃんはたくさ

んボールを取って、力強く投げている。そのまま、和也は一度もボールにさわることができずにチャイムが鳴ってしまった。みんなと歩く大好きな健ちゃんの後ろ姿を見て、和也はため息をついた。

ある日の夕方、和也が部屋で本を読んでいると、カチカチ、目覚まし時計の秒針の音がひびいていた。和也は、ぼんやりと秒針を見つめた。毎朝、目覚ましの鳴る六時半になったとき、時計はカツッと音を立てて、またカチカチと動き続けた。

（時計の中は、どうなっているんだろう。）

和也は興味をもった。

その数日後、父親のうで時計の電池が切れて、いっしょに時計屋さんに行った。小さなドライバーでねじをあけ、電池を交かんする様子がおもしろい。時計屋さんにたのみ、仕組みを見せてもらった。

「時計が好きなのかい？」

時計屋さんのおじさんが言った。

「時計というか……。機械かな……。」

それ以降、和也は、ますます様々な機械に興味がわいた。近所の自動車修理工場の様子をしゃがみこんで見たり、機械に関する本を読んだりするようにもなった。夏休みの自由研究で機械で動くおもちゃを作ってみんなをびっくりさせたり、健ちゃんの弟のおもちゃを直してあげたりもした。そして、いろいろな友達が、機械で分からないことがあると和也をたよって聞いてくるようになった。

こうして和也は大人になり、機械をあつかう仕事についた。東京を走る電車を整備する仕事だ。たくさんの人を乗せ、一日よく走った電車。和也はそのブレーキがちゃんときくかどうか点検し、必要な手入れを行っている。部品の一つ一つは重く、機械の油にまみれ、時間との戦いの中で、もくもくと作業は行われる。点検作業はチームで行われるのでそのチームワークも大切だ。機械をあつかうのは大好きだが、現実の仕事は厳しい。たくさんの人の命にかかわる仕事である。責任の重さは、部品の重さよりもずっと重くのしかかってくる。しゅ味と仕事は大ちがいだと感じる日々だった。

ある日、久しぶりに電車に乗ることになった。ホームに入ってきた電車の番号を見ると、この間、和也が手入れをした車両だった。耳をすまし、ブレーキの音を聞いた。

（よし。）

和也は無意識に、ブレーキの音に異常がないことを確認していた。

「和也じゃないか。」

和也は、その声にびっくりしたようにふり向いた。

「ぼくだよ。健太だよ。」

そこには、大人になった健ちゃんが、にこにこ笑いながら立っていた。健ちゃんは、何年かぶりの再会を喜んでくれた。健ちゃんは都心のスポーツ関係の会社に勤めており、和也の整備する電車に毎日乗っているそうだ。

そして、健ちゃんは別れ際にこう言った。

「ぼくは和也のおかげで毎日安全な電車に乗れるんだね。いい仕事をしているんだなあ……。和也らしい花をさかせたんだね。すごいなあ……。」

健ちゃんにそう言われて、和也はとてもうれしい気持ちになった。

（和也らしい花か…。）

和也は健ちゃんの言葉をかみしめていた。

（橋本　ひろみ　作）

# ペットの行方

土曜日の夕方、テレビを見ていると、ある河原で日本には生息していないはずのトカゲがつかまったというニュースが流れてきた。

「なんでそんなトカゲがいるのかな。」

ぼくは興味がわき、このニュースをしばらく見ていた。現在、日本にはいなかったはずの生物が多くなり、もともと日本に生息している生物が絶めつに追いやられようとしていると、ニュースキャスターは熱心に話していた。

昔はたくさんいたメダカや*タガメの数も、今では減少しているらしい。

（ふーん、ちょっと調べてみようかな。）

夕食までの間、ぼくはそのトカゲについてインターネットで調べてみることにした。すると、トカゲの他にも日本にはいないはずの様々な動物が日本に生息していることについての記事がのっていた。そして、そういった生物のことを「外来種」と言い、飼い主がペットとして飼っていた生物を、近くの公園などに無責任に捨ててしまうことなどが、外来種が増える原因だと分かった。

外来種が多く生息している場所として、家の近くの「石神井公園」の名前

*タガメ　こん虫の種類の一つ。

があった。ブルーギルという魚や、ミシシッピアカミミガメというカメなど、外来種の名前が書かれていた。

（あの池にもいるのか。）

その日の夕食時、家族に外来種の話をしてみた。すると、お父さんが言った。

「石神井公園にもいるのか。それは困ったな。」

「そういえばこの間、係の人が魚をとっていたな。あれは外来種をつかまえていたのかもしれないな。捨てた人はどんな人たちなんだろう。」

兄はおこっている。

「でも、池に捨てるのは仕方ないのかもよ。」

ぼくは話し始めた。

「だってこの前、転校した泰史君は、フェレットという小さなイタチのような生き物を飼っていたけれど、新しい家の事情で飼えないことになって、みんなにフェレットをもらってくれるようにたのんでいたよ。」

「それでどうなったの。」

と、台所からもどったお母さんは言った。

「結局、もらってくれる人がいなかったから、すごく困っていたよ。」
「そうか……。そのフェレットどうしたんだろうね。」
と、お父さんは一言だけ言うと、その後は何も言わずに、だまってご飯を食べていた。
みんなが食べ終わるころになって、お父さんは静かに話を始めた。
「いろいろな場合があるから、確(たし)かに難(むずか)しい問題かもしれない。でも、ペットを飼うからには、飼い主が責任をもつのは当然のことだね。それに、石神井公園の池のわきには、『外から持ちこんだペットを放さないでください。』というきまりが書かれた看板(かんばん)があるよ。見たことがあるかい。」
「……。」
いつも友達と遊ぶ公園だが、注意して看板を見たことはなかった。
「確かにあるなあ。」
と、思い出したように兄が言った。
「どうして、そういうきまりがあるのか。そのきまりの意味について、みんなが本気で考えなくちゃいけないな。」
と、お父さんは言った。ぼくはだまって聞いていた。
夕食が終わり、自分の部屋にもどっても、お父さんの話が気になった。

次の日曜日、ぼくは、石神井公園に行ってみた。お父さんが言っていたように池のわきの看板には、ペットを放してはいけないということが書かれていた。

ぼくは、池をのぞいてみた。ブルーギルやミシシッピアカミミガメの姿（すがた）は見えない。でもこの池には必ず外来種がいる。ぼくは池をずっと見つめていた。

（遠藤　信幸　作）

# 東京マラソンのボランティア

「利男、早く起きなさい。ちこくするわよ。」

お母さんの声は聞こえたが、布団から出たくない。ぼくはため息をついた。

今日は東京マラソンの日だ。「東京がひとつになる日」をテーマにした東京を代表するイベントだ。高校生になったぼくは、今年初めてボランティアとして参加する。

東京マラソンのボランティアの仕事はたくさんある。ランナーに水をわたしたり、荷物を預かったり、どれも大切な仕事だ。事前に学校でボランティアの内容について説明があり、ぼくたちの学校は、走っているランナーに水をわたす仕事をすることになった。

「パーン。」

と、ピストルの合図とともに、選手たちは走り出した。ぼくたちのいる給水所では、すごいスピードで水を取って走り去っていく人、友達といっしょに走っている人など、その人数の多さにぼくは圧倒された。始めは上手に水を

わたすことができるか心配で緊張したが、次々とのびてくるランナーの手に水をわたすことに精一杯で、しだいに緊張もなくなっていった。

しかし、上手にわたすことができない時もある。それでもたくさんのランナーから、

「ありがとう。」

と、声をかけられた。ぼくはいつの間にか、

「がんばってください。」

「ゴールを目指してください。」

と、気持ちをこめて力いっぱい声をかけていた。そして、上手に水をわたすように心がけた。ふと、今朝お母さんから聞いた話を思い出した。近所に住む高島さんも東京マラソンに参加しているというのだ。いつも、あいさつはするが、あまり話をしたことはない。

時間が経つにつれて、ランナーの数も少しずつ少なくなってきた。走ってくる集団を見ていると、ゆっくり走っているおばあさんがいた。

（高島さんだ。）

「高島さん。」

ぼくは大きな声を出した。高島さんはおどろいてぼくの方に来た。

「がんばってくださいね。水を飲んで、元気を出してください。」
と言って、ぼくは水を差し出した。高島さんは受け取りながら、
「ありがとうね。利男君もごくろうさま。水をわたすのがんばって。」
と言って、ポケットからハンカチを出して額をふいた。
「四十二キロメートルは長いわね。」
高島さんはそう言うと、また走り出していった。
すると、そのとき、高島さんの服のポケットから何かが落ちた。
ぼくは、すぐに、
「高島さん、ポケットから何か落ちましたよ。」
と、大きな声をかけたが、高島さんはもうだいぶ先に走っていってしまい、声に気付いてくれない。高島さんが落としていったものを拾ってみると、それはお守りだった。
（帰りに届けてあげよう。）

すべてのランナーが走り去り、給水所の片付けが始まった。テーブルやペットボトルなどを片付け、ぼくたちがいた場所はいつもの道路の姿にもどり、ボランティアの仕事は終わった。

「なんか楽しかったなあ。」
「そうだね。ありがとうと言われて、こっちがうれしくなったよ。」
クラスの友達は今日の話を興奮(こうふん)して話していた。
「利男、帰ろう。」
と、友達にさそわれ、ぼくは家に帰ることにした。

駅に着いた。電車の中からずっと、高島さんがゴールできのたかどうかが気になっていた。ぼくは手に持ったお守りをじっと見つめた。
（家に届けるか。でもゴールしていたらそろそろ帰ってくる時間かな。）
ぼくは、改札を出たところで立ち止まり、高島さんを少し待ってみることにした。
どれくらいの時間が経ったのだろう。
（もう家に帰っているのかもしれない。）
と思い、あきらめかけたその時、高島さんが改札から出てきた。高島さんの胸(むね)にはメダルがかかっていた。
「高島さん。」
ぼくはかけ寄(よ)った。

「これ、高島さんのお守りですよね。完走されたんですね。すごい。」
高島さんは優(やさ)しい声で言った。
「ありがとう。孫からもらった大事なお守りなの。とちゅうで落としちゃったことに気付いてね。よかった、見つかって……。完走できないかなと思ったときもあったけれど、たくさんの人ががんばれって言ってくれるでしょ。だからなんとかがんばれたわ。」
ぼくはにっこりと笑ってお守りをわたした。
「利男君の声もわたしの心にひびいたわよ。きっとたくさんの人にも届いたはずよ。」
ぼくはなんだか、照れくさかった。

ぼくと高島さんはとちゅうまでいっしょに帰った。高島さんは、ゴールまでの様々な出来事や、コースから見えた色々な風景について話をしてくれた。
東京マラソンはたくさんの人の心を一つにつなげてくれる、そんな行事だ。
「来年もボランティアとして参加しよう。」
ぼくは心にちかった。

（遠藤　信幸　作）

# 気をつけるのよ

いよいよ今週はサッカーの公式戦だ。早く練習に行きたい。信行は学校から家に帰るとすぐにしたくをした。

「じゃあ、サッカーに行ってくるから。」

げん関を出るとすぐに、自転車に乗って外へ出ようとした。すると、母がげん関から出てきて大声で言った。

「行ってらっしゃい。信行、事故にあわないように気をつけるのよ。暗くなったら、絶対にライトをつけるのよ。スピードを出しすぎてはだめよ。信行はあわてんぼうなんだから。」

「ああ、もうそれくらい分かっているよ。」

信行は、ふてくされながら、自転車をこぎ出した。

次の日、総合的な学習の時間に、「働く人の思いや考えから学ぼう」というテーマで、同級生の川口君のお母さんから話を聞いた。川口君のお母さんの川口康子さんは、都内の救命救急センターというところで働いているお医者さんだ。

東京都では、「いつでも、だれでも、様々な症状」の救急患者に対応できる東京ＥＲ（総合救急診療科）を設置していて、川口さんが働いている救命救急センターは、その東京ＥＲの一つである。

川口さんはとてもいそがしい中、ぼくたちの学習のために学校に来てくださったのだ。

救命救急センターというのは三百六十五日、二十四時間体制で救命医療を行う。一分でも一秒でも早く治療をしなければ命の危険にさらされる救急患者が次々と運ばれてくる。一人でも多くの命を救うために、ものすごい緊張感の中で、患者と向き合っている毎日だそうだ。

救命救急センターでの仕事について聞いてみると、川口さんは、先日運ばれてきた患者さんのことを思い出しながら話をしてくださった。

夜もかなりおそくなった時のことです。救急患者の治療が一段落し、少し眠ろうとしたときのことでした。

「先生、すぐに来てください。」

と看護師が大あわてで連らくに来ました。わたしはすぐに起きあがり、救急車のとう着場所に大急ぎで向かいました。すると、ちょうど患者を乗せた救

急車が着いたところでした。

「にん婦さんです。おなかが痛いとずっとうなっています。先生、お願いします。」

と救急隊員はわたしに伝え、患者をすぐに*ストレッチャーに移しました。そのにん婦さんは、強い痛みと苦しみのあまり、顔をゆがめていました。検査を終え、看護師といっしょに大急ぎで手術室へ運びました。にん婦さんの状態から、一刻でも早く治療をしなければ、おなかの中の赤ちゃんが危ないと思いました。

わたしは心の中で、

（赤ちゃんが無事に生まれますように。）

と願いながら、生まれてくる小さな命と向き合いました。

看護師は必死になって、苦しむにん婦さんをはげましていました。

そして、ついに赤ちゃんが生まれました。治療が間に合ったのです。本当にほっとしました。

「元気に大きくなるんだよ。」

看護師をはじめ、その場に立ち合った人はみんなで喜び合い、笑顔とはく

*ストレッチャー　患者をねかせたまま運ぶ車輪のついたベッド。

手に包まれました。
「この子が生まれてきたのは、みなさんのおかげです。ありがとうございます。大事に育てていきます。」
そう言いながら、お母さんの顔はうれしなみだであふれていました……。

信行は、
「本当に無事に生まれてよかったですね。」
と思わず声に出していた。
すると川口さんが次のように話をしてくださいました。

わたしは毎日、人の命と向き合って仕事をしているので、命があることは、本当にどれほど尊(とうと)いことかを身にしみて感じています。
救命救急センターには、様々な症状の人が次々と運ばれてきます。どの人も、一分一秒が生死にかかわる患者であることは同じです。人の命は比(くら)べられません。それぞれが、かけがえのない命です。わたしは、かけがえのない、その一人一人の命を救うために全力でがんばっています。
みなさんは、自分が生まれた時のことを聞いたことがありますか。きっと、

お母さんをはじめ、多くの人が無事に生まれてきたことを喜んでくれたことでしょう。

みなさんが、こうして元気でいられることも決して当たり前ではないのですよ。

信行は川口さんの言葉を聞いて、自分のことを考えてみた。

放課後、家に帰り、サッカーの練習に行く準備をした。

（いよいよ明日が試合だ。今日も早く行って練習をしないと。）

と信行は張り切っていた。

「今から、サッカーの練習に行ってくるから。」

家を出て、自転車に乗ろうとした。すぐに母がげん関まで出てきて

「行ってらっしゃい。信行、事故にあわないように気をつけるのよ。」

いつものように、母の声が追いかけてくる。

信行はふり向いて、笑顔で言った。

「お母さん、いつもありがとう。じゃあ、行ってきます。」

（鈴木　裕子　作）

# *江戸切子への道

江戸切子職人の横井章夫は、

「*あっしは、好きな江戸切子を職にできて、幸せ者だと思う。」

と、語る。「働く」とは、人のために動くと書くが、好きな道を極められて社会の役に立てれば、それに越したことはない。

横井は子供の時から器用で、小学校・中学校時代はものをつくることが得意な少年であった。小学生のときに作ったお面は学芸会の劇で使われたし、中学一年生の時に作った湯呑茶碗は父の愛用だった。横井は漠然と、

（将来自分の得意なことが生かせる職業に就けたらいいな。）

と、思っていた。

その横井に転機が訪れた。両親が相次いで亡くなったのである。横井は、小学六年生の時に母親を、中学二年生の時に父親を亡くし、その後中学校を卒業するまで兄に面倒を見てもらっていた。横井は、中学三年生になったとき、担任の先生に進路について相談した。

「僕は進学する気はありません。」

と、言った。担任の先生からは、

「進学しないことを後悔しないか。お兄さんも何とかすると言ってくれてるぞ。」

と、言われたが、

「いえ、これ以上、兄に面倒をかけたくありません。」

と、きっぱりと言った。

「では、就職するというんだね。」

*江戸切子
江戸末期に始まったカットガラスの伝統工法。ガラスの表面に彫刻をすることを工夫したのが始まりとされている。

*あっし
江戸ことば
江戸弁で「私」。

先生が念を押した。
「正直なところ、僕自身、働くという実感はまだありません。」
すると、先生が質問した。
「学校で勉強するのと、職業に就くというのは全然違うからな。どんな職業に就きたいと考えているのかね。」
「絵を描いたりものをつくったりすることが得意なので、できればそれを生かせる職業に就きたいと思います。」
と、横井は答えた。しばらくして、担任の先生は横井の得意なことが少しでも生かせるようにと、東京に住んでいる江戸切子の職人を紹介してくれたのだった。

弟子入りする前に、横井は江戸切子の工房の見学に出かけた。
（あんなきれいなものをつくるなら、やりがいがある。）
横井はすぐに江戸切子のカットの美しさに魅せられたのだった。

横井は、師匠のもとで一心に修行を積んだ。師匠は仕事一筋、「曲がったことは大嫌い」といった職人気質の人だった。横井が、
「郷里にいる友人のように、せめて週に一度休みがあったらなあ。」
などと愚痴をこぼすと、
「好きな切子の仕事ができるのに、休みがたりないとは何事だ。さっさと荷物をまとめて郷里に帰れ。」
と、雷が落ちた。いくら器用な横井でも、初めて入門する江戸切子の道は生易しいものではなかった。
単調な作業ばかりが続き、嫌になってしまうこともあった。
「少しは重要な作業ができれば、やりがいがもてるのになあ。」
と、今度は兄弟子につぶやく。すると、兄弟子から小言が飛ぶ。

「仕事に文句をつけるなんて十年早い。弟子は、与えられた仕事を黙ってやるもんだ。それで一人前になっていくんだ。」

思うような作業はさせてもらえない。連日続く単調な作業に閉口するばかりだった。

そんなある冬の寒い日に、*金剛砂の選定をしていたときのことである。連日の寒さの中で、横井はついうっかり、

「冷たい水の中で砂を二百種類にも振り分けるなんて手がかじかんでしまう。こんな修業はつらくて嫌になってしまうよ。」

と、弟弟子につぶやいた。弟弟子もうなずきながら応えた。

「僕も郷里に帰りたい。職人の道は厳しいな。」

すると、どこでどう聞いていたのか、師匠から、

「何言ってやがる。地道な作業がなけりゃ切子はできやしない。集中してやらないと江戸切子が泣くぜ。それに、ごひいきにしてくれるお客さんのためにも、愛情をもって作業をしないでどうするんだ。」

と、大声でしかられた。そんなとき、師匠のまなざしは職人としての誇りに満ちていた。そんな師匠の江戸切子に注ぐ情熱とお客さんへの気持ちに感動し、横井は自分も師匠のような一人前の職人になろうと決意した。

弟子入りして十年以上が経ち、横井は二十八歳で独立した。江戸切子の世界では、修行を終えた弟子は師匠の工房で職人として働き続けるか、師匠のもとを離れて自分の工房を構えるかの二つに分かれる。横井は独立することを選択した。独立当初は、生活のためにがむしゃらに江戸切子を作った。数多く売ることで、次第に横井工房の経営も軌道に乗っていった。

しかし、横井が四十歳を過ぎた時、横井工房に、お客さんからのクレームがきた。

*金剛砂　ガラスを切断したり、ガラスに細工をしたりする際に使う砂。

「横井工房では、客に傷ものを売るのか！」

お客さんはかんかんに怒っている。商品は、横井工房の最も売れ筋の「青い花瓶」であった。横井が確認すると、模様のカットにずれがあった。仕事の忙しさに追われて、出来栄えを一つ一つ確認する作業を怠ってしまったのだ。師匠のような職人になりたいと思っていたのに、お客さんの立場で仕事をしていなかった。ごひいきのお客さんから勧められて購入した新規のお客さんをないがしろにしてしまっただけでなく、ごひいきのお客さんの信用まで失わせてしまったのである。

横井は大いに反省した。作品の質の低下は、職人として許しがたいものである。今までの姿勢を改め、一つ一つに心をこめ、江戸切子を世に広めていこうと誓った。さらに、師匠から受け継いだ心「お客さんのために」を信条として、販売もできる限り自分で行うことにした。それは、「自分で作ったものには責任をもつ。自分で販売もすることで、お客さんに安心して買ってもらえる。」という理由からだ。お客さんと向かい合えば、仕事の良し悪しを肌で感じることができる。いい加減な仕事はできない。横井は、江戸切子職人としてのこだわりを大切に仕事をしようと、改めて決意した。

再び横井工房は信用を取り戻した。

失敗を振り返りながら、横井は若い弟子たちに語った。

「あの時のお客さんのおしかりは、あっしにとっては師匠の教えと同じくらい身にしみたよ。機械と違って、お客さんのイメージにあったものをつくることができるのが職人ならではの技なんだ。お客さんの満足した顔を見るのが何よりの喜びさ。お客さんと向かい合うことで自分の腕も上がるってもんだ。」

現在、師匠の心を受け継ぐ横井は、制作のかたわら江戸切子講座の講師も務めている。内容は、江戸切子の基本カットから最終仕上げの手磨きについて講演するというものだ。一般の人を相手に、江戸切子を教えることで、自分も新しい発見をすることができる。これも江戸切子の普及に役立っていると胸を張る。自分の職業に誇りを抱いている者の自信がみなぎっている。

「あっしは実に幸せ者だ。自分の好きな道を職業にして、生きがいのある人生を送っている。江戸切子を通して、社会を支えることができていることを実感する。今の若者の中には、仕事に就いても、すぐにやめてしまったり、就職しないことが当たり前だと思ったりしている人もいるらしいが、そんなのはもったいないなあ。仕事をして世の中の役に立つってのはいいもんだよ。」

と、横井は若い弟子たちにしみじみ語るのである。

（坂口　幸恵　作）

江戸切子の花瓶
東京カットグラス工業共同組合ホームページより

# 誰のために……

東京でもまだまだ残暑が厳しい中、達也の学校の始業式が体育館で行われた。その後、夏休み中に都内の中学生が重傷を負う自転車の交通事故が多発したという話が、生活指導の先生からあり、達也の学校では自転車利用マナー講習会が行われることとなった。この講習会は、生徒が安全な自転車の乗り方や交通ルール、運転マナーを学ぶことで、自転車による交通事故を防止し、社会のルールを守る意識を育てることを目的としていた。

講習会の日の朝、達也はいつもより少し遅れて家を出た分を取り戻そうと、自然と早歩きになっていた。学校へ行く途中、最初の交差点の信号は赤だったが、車の来る気配がなかったので交差点を渡り始めた。その時、聞き慣れた声がした。

「信号無視をしている中学生発見。」

達也が振り向くと、佐知子がいつの間にか後ろに立っていた。佐知子は、家が二軒隣で、小さいころから姉弟のように育てられた幼なじみである。しっかり者の佐知子は、面倒なことを嫌う達也にとって世話好きのお姉さん役だったが、中学生になって、達也には佐知子の真面目さが少し窮屈に感じられるようになっていた。

「なんだよ、いきなり。」

達也は、佐知子がこんな時間にいることが珍しいので驚きを隠しきれなかった。佐知子を無視すると後で厄介なので、交差点を渡ったところでいったん止まった。

「だって、赤だよ。」

佐知子は少し怒っていた。

「分かってるよ。でも、ここはほとんど車が通らないし誰にも迷惑をかけてないだろ。いちいち俺に構うなよ。」

「だって、たっちゃんのおばさんから『達也のことよろしくね。』って言われているし……。それに、本当に誰にも迷惑をかけていないのかな。」

佐知子は、不満そうな表情で信号が青に変わるのを待っていた。佐知子が正しいことは分かっていたが、これ以上返す言葉が見つからなかったので、達也はそのまま一人で学校に向かった。

朝学活では担任の先生から、午後に体育館で行う自転車利用マナー講習会の持ち物などについて連絡があった。そのとき達也の心は、面倒だなあという気持ちが大半を占めていた。日頃の自分の自転車の乗り方を考えると、講習会では耳が痛い話を聞くことになると予想できたからである。さらに、まだまだ残暑が厳しく温室のように暑い体育館を考えると、気持ちはかなり沈んでいた。

給食後、体育館へ移動し、講習会が始まった。警察の人が講習会用に制作したドラマは、生徒の視線をスクリーンへと引き付けた。映像が衝撃的だったからだ。

その内容は、自転車の二人乗りをした中学生が、かなりのスピードで信号無視をして道路を渡ったとたん、車と衝突し、救急病院に搬送されるといった映像だった。そして、この事故によって本人たちがけがをして痛い思いをしただけでなく、家族を含め多くの人が心を痛めたことも、この映像はメッセージとして伝えていた。

引き続き警察の人は、自転車利用の正しいマナーについて詳しく説明をしてくれた。映像にあったような、自転車の二人乗りやスピードの出し過ぎ、信号無視の他にも、二列走行、無灯火走行などが中学生に多い違反であるとのことだった。また、平成二十一年七月からは、傘差し運転や運転中の携帯電話の使用が禁止になったことも再度確認された。さらに、東京都が行ったアンケート結果の説明があり、自転車は歩道ではなく車道の左端を通行しなければならないことを、都民の半数が知らなかったという集計結果には驚かされた。

そして、警察の人は講習会のまとめとして、次のような言葉で締めくくった。

「われわれ警察官が、取り締まりをしているのは、そこに暮らしている人々の安全を守るためです。

そして、交通事故をゼロにしたいと思っています。そのためには、みなさんに交通安全への意識を高めてもらうことが必要です。」

この言葉は、達也の心に残った。

「今日の話を受けて、ルールとは何のためにあるのかを、みなさんに考えてもらいたい。」

という話が担任の先生からあり、その後下校となった。

達也は、どことなく心に引っかかるものを感じながら家に帰った。

家に着くなり達也は、自転車に乗り、友達と待ち合わせをしていた公園に向かった。そして、公園で遊んだ後自転車に乗って一人で帰る途中、目の前の交差点の信号が点滅し始めた。達也はいつものように、何とか渡ってしまおうと、スピードを上げるために自転車のペダルを強く踏み込んだ。ところが、無理して渡るにはちょっと危険なタイミングだったので急ブレーキをかけて止まった。

すると、車道側の信号が青信号になったと同時に、二台の車が勢いよく発進した。達也は、それを見てほっとしたが、後に続く車がなかったため、青信号になるまでの時間がとても長く感じられた。

そして、

（もう行っても大丈夫だろう。）

という気持ちがわいてきたときには、赤信号を渡り始めていた。

ドキッとする声が聞こえたのはそのときだった。

「あのお兄ちゃん、赤なのに渡ってるよ。」

一緒に信号待ちをしていた男の子がお母さんに訴えていた。

男の子の声は確かに聞こえたが、達也には振り返ることができなかった。

「きっと急いでいるのよ。でも、信号は守らないとね。」

その子のお母さんがやさしく男の子に話していた。

達也は、もやもやした気持ちを抱えながら家に向かった。

「ただいま。」
家に着いて、母の姿を見るなり、朝の佐知子とのやりとりについて話し始めた。
「まったく、佐知子はいちいちうるさいよなあ。それに、母さんだって佐知子に余計なことを言わないでよ。佐知子は母さんから『達也のことよろしくね』って言われてるって言ってたよ。」
「あら、余計なことかしら。さっちゃんみたいな子に達也を見ててもらえて、母さんは安心だわ。私が言ってもあなたはなかなか素直に聞かないでしょ。ところでさっちゃんに何を言われたの。」
母は、すぐに聞き返してきた。
「今朝、そこの道路を渡ろうとしたとき、信号を守れとかなんとかさあ。」
「ということは、あなたが赤信号で渡ってたってことでしょ。」
「だってあの道路は、車がほとんど通らないから赤信号で渡っても誰にも迷惑かけてないでしょ。」
達也は、佐知子に言った言葉を母にも言ったが、心なしか自信がなかった。
「本当にそう思う。」
母は、力強く続けた。
「中学生が赤信号を渡っているのを見た小さな子供は、僕も渡れるなんて思うでしょ。そして、その小さな子供が事故にあったりしたらどうするの。」
母は、とても具体的に話を進めた。
「それはその子がちゃんと左右を見なかったからじゃないか。」
「そうかしら、事故にあった小さな子供だけの責任と言い切れるかしら。」
「母さんの話は極端すぎるよ。」
達也は、そう言い残して自分の部屋のある二階へと逃げるように上がっていった。ベッドの上に大の字になり目を閉じると、今日の講習会の最初の映像が鮮明に思い出されたのと同時に、「誰にも迷惑かけてない。」という自分の言った言葉の意味を考えていた。

（篠塚　浩幸　作）

# 土器のかけら

小学生の頃のぼくは、風変わりなものを集めるのが好きで、石ころやセミの抜け殻などを拾ってきては母にあきれられたものだった。だから、学校では理科や社会が好きで、その授業が楽しみだった。

六年生のある日、社会の歴史の授業で担任の先生が、

「都内にはたくさんの遺跡があります。以前、この近くからも、土器が出てきました。」

と、教えてくれた。何日か後、ぼくは、偶然にも畑の近くで土器のかけらのようなものを見つけた。先生の話を聞いた後だったせいか、そのかけらとの出合いに不思議な感動を味わったが、そのかけらが何なのかも分からないまま、時間だけが過ぎていった。

中学校に入学すると、ぼくはどの部活動に入るか悩んでいた。特に入りたい部活動が見つからなかったからだ。サッカー選手にあこがれ、サッカー部に仮入部をした友達が楽しそうに練習の話をしていたので、何となくぼくもつられて仮入部をしてみた。しかし、いつもみんなの後ろをついていくばかりで次第につまらなくなり、サッカー部には入部しないことにした。そして、部活動など入らなくてもいいとさえ思うようになった。

その頃のぼくは、相変わらず、社会の授業だけは好きだった。とりわけ白地図をていねいに塗り分けるような、こつこつと作業をする学習では、時間はかかっても自分が納得するまで取り組んだ。

社会科を担当する横山先生は、

「色づけが丁寧で、見やすい地図ができたね。」

と、ぼくの作業を認め、みんなに紹介してくれた。いつもは目立たないぼくも、このときばかりはみんなの注目の的となり、晴れがましい気持ちになった。

ある日のこと、社会の授業が終わると横山先生はぼくを呼んで、部活動の話をした。

「入る部が決まっていないのなら、歴史研究部に入ってみないか。」
と誘ってくださった。先生は歴史研究部の顧問だった。
「えっ、歴史研究部ですか……。」
突然のことに、ぼくが戸惑っていると、先生は、
「清水君は時間をかけてこつこつと作業をすることが好きそうだから、歴史研究部に向いていると思うんだが……。」
と、付け加えた。
「返事は、いつでもいい。」
と言われて、ぼくは迷った。横山先生の授業は好きだったし、先生なら自分のことを分かってくれるような気がした。けれども、
（部活動など入らなくてもいい。）
と、思っていただけに、入部届けを出すことにためらいがあった。そのとき、ふと、ぼくは小学六年生のときに見つけた土器のかけらのことを思い出し、先生に見せたくなった。
翌日、その土器のかけらを横山先生に差し出すと、先生は丁寧に説明してくれた。
「すごいね。これはおそらく縄文時代中期から後期にかけて作られた*深ばち型土器の一部だろう。それにしてもこのヘビの*文様は珍しいね。これをどこで見つけたんだ。」
「家の近くの畑のそばで見つけました。」
ぼくは少し控えめに答えたが、先生に自分の宝ものを認められ、ほめられたようで内心はとてもうれしかった。このことがきっかけとなり、ぼくは、入部届けを出す決心をした。
入部してまもなく、横山先生の引率で歴史研究部が遺跡発掘現場に実習に出かけることになった。発掘現場に到着後、調査員の方から発掘調査の注意事項を伝えられると、早速、土器を掘り出す実習が始まった。初めての本格的な実習に、ぼくを含めて部員のみんなはすぐに土器の掘り出しに夢中になった。そして、始めてから一時間もたたないうちに部員のほとんどが土器のかけらを掘り出したよ

深ばち型土器（勝坂式）
三鷹市遺跡調査会「みたか遺跡展示室」ホームページより

*深ばち型土器
縄文土器の基本的な形の土器。

*文様
模様のこと。

うだった。出かける前には、誰が一番早いか競争する話も出ていたが、ゆっくりと丁寧に作業をしたいぼくには、そんなことはどうでもよいことだった。

みんなよりかなり遅れて、土器のかけらを掘り出したぼくは、集合場所へと急いだ。手には、掘り出したばかりの土器のかけらを大切に持っていた。そして、それを横山先生の前に差し出すと、受け取った先生はしばらく土器のかけらを見つめてから、集まった部員に話し出した。

「全員が、土器のかけらを掘り出すことができた。でも、掘り出し方が荒(あら)い。だが、清水君のを見てごらん。これは時間をかけて刷毛(はけ)を使い、丁寧に作業した跡(あと)が分かるものだ。」

ぼくは有頂天になった。ぼくの掘り出した土器のかけらが横山先生に認められ、みんなの前でほめられたのだ。

その頃、学校の近くで大規模な発掘調査が進められていた。歴史研究部からも何人か参加できることになり、ぼくは自分から希望して発掘作業を手伝うことになった。この前の実習で、自分の発掘に自信をつけ始めていたぼくは、大規模な発掘調査に心を躍(おど)らせ、作業への期待で胸がいっぱいだった。

しかし、毎週土曜日に手伝う発掘調査は、思った以上に大変で根気のいる作業だった。調査員の人たちは、みんな黙々(もくもく)と作業をしているが、いくらやっても土しか出てこない。作業を手伝い始めてニか月経った頃には、いくらゆっくり、じっくり型のぼくにも迷いが生じてきたのである。

あるとき、親しくなった調査員の一人に尋(たず)ねてみた。

「二か月も何も出てこない発掘の作業は、つまらなくないですか。」

「つまらないなんて、思ったことはないね。二か月や三か月何も出てこないのは、珍しくないことだ。」

「えっ、珍しくないことなんですか。」

ぼくは、驚(おどろ)いて聞き返した。

「二、三か月なんて作業したうちには入らない。発掘に時間がかかるのは、当たり前なんだ。」

という答えが返ってきた。それを聞いたぼくは、

（それじゃあ、いったいこの作業はいつまで続くんだ……。）
という迷いが強くなった。
ぼくは、横山先生を訪ねた。
「この二か月間いくらやっても土しか出てきません。本当にこのまま続けていいのでしょうか。」
と、尋ねた。すると、先生は、
「清水君の迷う気持ちはよく分かる。でも、古代から時間をかけて*堆積してきた土と向き合い、時間をかけて出合ったものだからこそ、見えてくるものがあるんだ。」
「何が見えてくるんですか……、どうしたら見えてくるんですか……。」
「それは、出てきたものが教えてくれるさ。きみなら、できると思うんだが……。」
と、励ましてくれた。『見えてくるもの』という横山先生の言葉が気にかかった。そしてぼくは、もう少し作業を手伝ってみることにした。
その後、二か月経ってから、柱穴の一辺が一メートルもある*掘立柱建物の跡が発見された。長い時間をかけて少しずつ土を取り除いて発掘された遺跡を目の前にして、ぼくはその柱の跡のとてつもない大きさに驚いた。多くの調査員が最後まであきらめずにこつこつと作業に取り組んだからこそ、味わえた感動だった。発掘という作業は、地味で、根気がいる。誰もがあこがれる派手な仕事ではないが、ぼくにとっては、自分らしさが発揮できる仕事だと感じた。そのとき、横山先生の『見えてくるもの』の答えが分かったような気がした。

ぼくは今、博物館で働いている。出土した土器のかけらをつなぎ合わせて、もとの形に復元する修復師の仕事に就いて五年になる。時間がかかり根気のいる仕事だが、充実した毎日を送っている。横山先生はぼくに自分らしさを生かせる道を示してくれた。土器のかけらを手にするたびに、ぼくは先生を思い出す。

（菅野　由紀子　作）

*堆積
土砂などが高く積み重なること。

*掘立柱建物
地面に穴を掘り、そこに柱を立てて、地面を底床とした建物。

# お父さんの思い

二〇一二年・春

「お母さん、やっぱり、スカイツリーはここからの眺めが一番だよね。」
朋子は、隅田川を前景にして天にそびえるように建つ東京スカイツリーを見ながら言った。
東京スカイツリーはこの春、開業した。朋子にとって、ここ隅田公園から東京スカイツリーを見るのは二度目であった。一度目は、記録的な猛暑に見舞われた二年前の夏、東京スカイツリーは建設途中で、四〇〇メートルを超えたところだった。

二〇一〇年・夏（二年前）

中学三年生の朋子は、母と一緒に、総合病院へ入院している父のお見舞いに行く前に、隅田公園に寄って、東京スカイツリーの写真を撮った。朋子は、いろいろな場所から東京スカイツリーの写真を撮ることが最近の趣味のようになっている。
今日は、父の誕生日。病院に着くと、父の担当看護師の桜井さんたちも誕生日のことを知っていて、声をかけてくれた。
「田中さん、今日は朝からそわそわしていましたよ。後で私たちも顔を出します。私たちからのプレゼントもありますので……。」
母が桜井さんに礼を言い、父の病室に向かった。母は、
「来たわよ。」
と、明るい声をかけて病室に入っていった。朋子は母の後から、おそるおそる入っていった。パジャ

マ姿の父はベッドの上で上半身を起こしていて、
「ああ、来たか。」
と軽く手を挙げた。朋子はそれを見るとホッとして、ニコッと笑った。
「だいぶよくなっているみたいね。この前来たときより、元気みたい。よかった。はい、プレゼント！
お誕生日おめでとう。」
と言って、後ろ手に持っていた花束を差し出した。
「おお、ありがとう。母さん、さっそく花瓶に生けてくれないか。」
と言って、受け取った花束を母に手渡した。
「今日もたくさん、スカイツリーの写真撮ってきたよ。ここからのスカイツリーは、私のコレクション
のベストスリーに入るかな。ほらね。」
朋子は、撮ってきたばかりのデジタルカメラの写真を父に見せながら言った。
「二〇一二年にできるんだよ。みんなで行こうね。」
たたみかけるように朋子は言った。そこへ、
「おじゃましていいかしら。」
と、看護師の桜井さんたちが入ってきた。
「お誕生日おめでとうございます。私たちからのプレゼントです。」
と言って、色紙に書いた寄せ書きを手渡した。
（今日の笑顔は最高です　　桜井）
（今のよい体調が続くとよいですね　　柴田）
父が寄せ書きを見ている横から朋子ものぞきこんでいたが、
「私にも書かせて。」
と言って、色紙を父から奪うように取った。
「なんて書こうかな……。」

いたらずらっぽい笑いを浮かべて、父を横目で見ながら言った。
「決めた。」
（私の誕生日は、お家で一緒にパーティーをしようね　　朋子）
こう書くと、両手で父の目の前に色紙を差し出した。
「どう。私の誕生日まであと二か月あるから、今の調子だったら大丈夫よね。お父さん頑張ってね。約束よ。」
と、一気にまくし立てるように言った。
そのとき父は、ちょっと悲しく笑い、母も看護師たちも下を向いていたが、朋子はそのことに気がつかなかった。
その後、朋子は何度かお見舞いに行った。父は少し痩せたように見えたが、元気そうだったので、朋子は安心していた。
朋子の誕生日の二週間前。母が言った。
「明日の土曜日は、お父さんの所へ行くからね。一時には帰ってきてよ。」
「えっ、バレー部の練習試合があるんだけど……。明日は試合に出られるかもしれないんだ。どうせ誕生日に会えるんだから、行かなくてもいいでしょ。」
「……。」
母は、黙っていた。
そして迎えた朋子の誕生日。
「お父さん、お帰りなさい。退院はできなかったけれど、家に帰れてよかったね。朋子の誕生日、一緒にお祝いしてね。」
ここ数日、父は体調がよく、先生から外出の許可がもらえたのだ。
「朋子の誕生日だからな。お父さん頑張ったよ。」

「そうだよ。だって、約束だものね。」
朋子ははしゃぎながらそう言うと父の腕(うで)につかまった。
「おっとっと。危ないよ。」
父はちょっとよろけたが明るく笑った。
「お母さんが作ったおいしいケーキがあるんだよ。みんなで食べよう。」
「ケーキの前に……。これ、お父さんからのプレゼント。朋子のために描(か)いたんだ。」
父はそう言うと、額に入った水彩画(すいさいが)を差し出した。それは、隅田川越(ご)しにそびえる東京スカイツリーの絵だった。手前には、隅田公園の満開の桜が描かれていた。しかも、その東京スカイツリーは、完成した姿だった。
「わあ、すごい。いつ描いていたの。」
「ないしょだよ。」
「それに、このスカイツリー、完成したスカイツリーだね。桜も咲(さ)いて……。そうか、二年後を想像して描いたんだね。なんだかわくわくしちゃうね。」
楽しいひとときが過ぎていった。つかの間だが、家族三人の生活が戻(もど)ってきたようだった。父も満足して病院へ戻った。

翌日の朝。
「お母さん、このスカイツリーの絵、ここに飾(かざ)ろうよ。あの調子ならもうすぐ退院だね。」
朝食の準備をしている母に朋子が言った。と、その時、電話が鳴った。母は電話を取ると何も話さなかったが、次第に顔が青ざめていった。そして、
「わかりました。すぐ行きます。」
とだけ言って、電話を切った。そして、朋子に、
「お父さんが危篤(きとく)だって……。すぐ病院へ行きましょう。」

病院に着いた母と朋子に見守られて、父は深い眠りにつくように息を引き取った。本当に眠っているような顔をしていた。朋子は思わず、父の肩を揺すって言った。
「お父さん……、目を覚ましてよ……。」
母が、朋子の両肩に手を置いた。朋子は母を見上げた。母もあふれ出る涙を拭おうとはしなかった。

看護師の桜井さんが父の様子を話してくれた。
「田中さん、『朋子の誕生日には絶対に帰るんだ。』って、それはそれは楽しみにしていました。朋子さんへ絵を贈ることを決めてからは、『この絵を私の生きた証にするんです。』と言って、絵の前に座るとそれまで具合が良くなくても急に元気になっちゃうんです。それに不思議なことに、誕生日が近づくにつれて体調もすごく安定しだしたんです。『よかったですね。』ってみんなで言ってたんですけど……。」
朋子は、何も考えられないといった様子で立っていた。さらに桜井さんは続けた。
「昨日、夕方病院に戻ってこられたときには、田中さんはとても穏やかなお顔をされて、『ただいま。ちょっと疲れたからもう休みます。』とだけ言って横になられたんです……。」
「そうですか……。主人も覚悟はできていたと思います……。ありがとうございました。」
母は、そう言って丁寧にお辞儀をした。そして、いつまでも頭を上げようとはしなかった。

二〇一二年・春

「お父さんの絵の通りだね。お父さんには、この景色が見えていたのかな……。」
高校二年生になった朋子が、東京スカイツリーを見ながらつぶやいた。
「そうね。お父さんには見えたのかもね……。」
母が、空を見上げるようにして答えた。

（お父さん、私、今でもバレーボールを続けているよ。私も頑張っているよ……。）

朋子も母と並んで空を見上げて、心の中でつぶやいた。

（小貝　宏　作）

画像提供：東武鉄道株式会社・東武タワースカイツリー株式会社

# 第二章　読み物資料の活用

小学校低学年　内容項目　3―(1)

# つながるいのち

一　ねらい

生命のつながりを喜び、生命を大切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・児童にとって親戚などが祖父母の家で集まる機会は特別なものであり、魅力的なことである。

・主人公が先祖代々の写真や柱のしるしを見付ける場面を通して、生命のつながりや連続性を感じさせたい。柱に主人公の「生きてきた証」を残す場面を通して、生きていることの実感と喜びにつなげたい。

・いとこやおじさんなどの親戚の登場からも、生命の広がりについて気付かせたい。

三　指導上の留意点と工夫

・各発問での思考や発言を、「おもしろい」、「すごい」といったものだけに終わらせず、生命の不思議さや連続性など多面的な視点から生命について考えられるように発言を促す。

・話の内容が理解できるように、導入で写真などを生かし、お父さんやお母さんのふるさとの様子を話し合わせる。

・先祖代々の写真や柱のしるしなど、補助説明を取り入れるなど、児童がイメージしやすくなるような工夫をするとよい。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　お父さんやお母さんのふるさとについてのイメージを話し、資料に興味をもつ。<br>○　お父さんやお母さんのふるさとに行ったことがあるか。どんなところだったか。 | ・写真などを用意し、児童にふるさとのイメージをもてるようにする。 |
| 2　資料「つながるいのち」を読んで、話し合う。<br>(1) 昔の人の写真を見ながら「ぼく」はどんなことを考えたか。<br>・この写真は誰だろう。<br>・どうして写真が飾ってあるのかなあ。<br>・おじいちゃんと関係があるのかなあ。 | ・自分との関わりで、先祖とのつながりを感じている「ぼく」の考えを想起させる。 |
| (2) みんなが生きてきたしるしを見ながら、「ぼく」はどんなことを思ったか。<br>・生きてきたしるしが残っていて、すごいなあ。<br>・ぼくのお父さんもこんなに小さかったんだ。<br>・なんだかふしぎな気分だなあ。どこまで昔のしるしがあるのかな。 | ・「すごいなあ」といった発言だけで終わらないように、生命の連続性について考えられるよう促す。 |
| (3) 柱のしるしを見てにっこりしたときの「ぼく」はどのような気持ちだったか。<br>・ぼくも仲間入りできてうれしい。<br>・お父さんの背と比べてどうなのかな、気になるな。<br>・来年もまたしるしをしてもらおう。 | ・生きている証を実感し、そのことに喜びを見いだすことによって生命の大切さを自覚できるようにする。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　親、兄弟、親戚と生命がつながっているなあと感じたことはあるか。<br>・ある。不思議だなあと思った。<br>・嬉しかった。 | ・生命がつながっていると感じたときの気持ちについても考えさせる。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

小学校低学年　内容項目　2―(2)

# わたしが　もちます

一　ねらい

身近にいる人に温かい心で接し、親切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・都内でも高齢者だけで生活する世帯が増えている。身内だけではなく地域の支えが必要となる場面が、これからますます増えてくるであろう。

・本資料は、一年生の主人公が、学校で地域の高齢者を招いて行う「ふれあい給食」をきっかけに、自分から親切な行為を行うことのよさに気付く内容になっている。

・主人公が手助けをしたい気持ちと、恥ずかしいという気持ちとで葛藤しながらも、自分が必要とされ、感謝される喜びを通して、親切にすることのよさに触れさせたい。

三　指導上の留意点と工夫

・指導の時期としては、一年生であれば、ふれあい給食や伝承遊びなど、地域の高齢者との交流活動を経験した後が効果的である。

・資料では親切にする対象が高齢者であるが、振り返りの過程では、身近にいる全ての人を対象に考えさせるようにしたい。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　高齢者と触れ合った経験を想起する。<br>○　高齢者と会ったり、話したりしたことはあるか。 | ・日常生活の中で身近な高齢者とどのような関わりをしているかについて考えさせる。 |
| 2　資料「わたしが　もちます」を読んで、話し合う。<br>(1) 上田さんが、さやかと同じアパートに住んでいるのが分かったとき、さやかはどのような気持ちだったか。<br>・また会えるといいな。<br>・こんどは自分から挨拶をしよう。<br>(2) 階段で、迷っているさやかはどのようなことを考えたか。<br>・手伝いたいけれど、声をかける勇気が出ない。<br>・つえをついているから、階段を降りるのは大変だろうな。<br>・上田さんを助けてあげたい。<br>(3) 次のときも、「わたしが　もちます。」と言おうと思ったのは、どのような考えからか。<br>・上田さんにお礼を言われてうれしかったから。<br>・喜んでもらえると、自分もうれしいから。 | ・上田さんが身近な存在であることが分かり、親近感を抱く主人公に共感させる。<br><br>・手を差し伸べようかどうしようかと迷う場面では、葛藤の中から、相手のことを思い、手を差し伸べようとする気持ちを引き出す。<br>・親切な行為が、相手に喜ばれる心地よさを押さえる。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　困っている人を見て、親切にしたことはあるか。<br>・近所に住んでいる幼稚園の子供が泣いているときに、声をかけた。<br>・おじいちゃんが前をゆっくり歩いていたけれど、ぬかさず後ろをゆっくり歩いた。 | ・高齢者だけではなく、いろいろな人に対して親切にすることの大切さを考えさせる。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

小学校低学年　内容項目　4―(1)

# はくぶつかんで

## 一　ねらい

約束やきまりを守り、みんなで使うものを大切にする心情を育てる。

## 二　資料選定の理由

・都内には、博物館や美術館を始めとした公共施設が多数ある。多くの人が集まる場所では、お互いが気持ちよく利用できるよう、様々なきまりが存在する。

・低学年の児童が、日常生活の中で公共の場所や公共物を意識する機会は少ない。だからこそ、この時期から積極的に意識させる機会を設けることが大切である。本資料では、児童が興味をもちやすい場面を設定し、より身近なものとして捉えられるようにした。

## 三　指導上の留意点と工夫

・本資料は前半の場面では、公共の場所でのきまりについて、また、後半の場面では、公共物を大切に扱うという視点で組み立てている。両方を意識させるために、導入では場所と物の両方について触れておくとよい。

・資料の前半の場面では主人公は相手のことを考えずに行動してしまうが、後半の場面では自分で考え、望ましい行動をする。主人公の心の変化を追うことで、ねらいとする道徳的価値に迫りたい。また、振り返りの場面では、きまりは他の人のことを考えて存在していることを意識させるために、行為の根拠についても考えさせることが大切である。

## 四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　みんなで使う場所や物について想起する。<br>○　みんなで使う場所や物には、どんなものがあるか。 | ・個人的な場所や物と、公共の場所や物との区別を明確にさせる。 |
| 2　資料「はくぶつかんで」を読んで、話し合う。<br>(1)「だって……。」といって口をとがらせたけんじは、どのような気持ちだったか。<br>・早く見たいんだから、いいじゃないか。<br>・お母さんは、どうして怒るのだろう。<br>(2) 走ってきた男の子をじっと見つめるけんじは、どのような気持ちだったか。<br>・いたいなあ、危ないじゃないか。<br>・ぼくも、あんなふうに迷惑をかけたんだな。<br>(3) 注意書きを見たけんじは、どのようなことを考えたか。<br>・他の子も触っているから、ぼくも触りたい。<br>・きまりは、守らなきゃいけない。<br>(4)「きまりは、まもらないとね。」と言ったけんじは、どのような気持ちだったか。<br>・守らないと、みんなが困る。<br>・みんなが気持ち良く過ごせるように、これからは自分から守ろう。 | ・けんじの自己中心的な思いを出させ、(2)の発問と対比させる。<br>・けんじに共感させ、きまりを守る意義について考えさせる。<br>・自己中心的な思いと、公共のきまりを守ろうとする思いとの間で葛藤させる。<br>・きまりを守ることによる心地よさについて話し合わせる。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　みんなで使う場所や物を使うときに、どのようなきまりを守っているか。また、それはどうしてか。<br>・ボールをきちんと片付けている。それは、次に使う人が困るから。<br>・図書館では、大きな声でしゃべらないようにしている。それは、本を読んでいる人に迷惑がかかるから。 | ・理由も問うことで、きまりを守ることとは、他の人のことを考えることでもあることに触れる。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

小学校中学年　内容項目　3―(1)

# ライオンの赤ちゃん　ハナ

一　ねらい

生命の尊さを感じ取り、生命のあるもの全てを大切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・人間は身の回りにいる生物たちと共存している。しかし、普段人間は自分たちを中心に考えながら生活しがちであり、他の命を大切にしなければならないことをふと、忘れてしまうことがある。

・本資料は、大けがを負ったライオンのハナについての話である。歩けないライオンは群れに受け入れられない可能性がある。大けがを負ったハナを見守る山川さんの心情を追いながら、懸命に生きようとする生命の尊さを感じ取り、生命を大切にしようとする心情を育てたい。

三　指導上の留意点と工夫

・導入でライオンの写真を提示し、児童に資料についての関心をもたせる。

・大けがを負ったハナが、もがきながらも歩けるようになっていく姿を見守る山川さんの心情を追いつつ、生命のあるもの全てを大切にしようとする心情を育てたい。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　ライオンの写真を見て、資料に興味をもつ。<br>○　動物園に行ってライオンを見たことがあるか。 | ・ライオンの写真を提示し簡単に説明する。 |
| 2　資料「ライオンの赤ちゃん　ハナ」を読んで、話し合う。<br>(1) 気が重くなったときの山川さんはどんな思いだったか。<br>・ハナの生命はどうなってしまうのだろうか。<br>・ハナを歩けるようにさせてこの動物園で育てたい。<br>・こんな状態で過ごさせては、ハナがかわいそう。<br>(2) ハナの姿を何日も見守っているときの山川さんはどんな気持ちだったか。<br>・ハナは一生懸命歩こうと頑張っているんだ。<br>・歩こうとするハナの強さが感じられる。<br>(3) 「ハナを見守ってきてよかった。」と思った山川さんの心の中はどうだったか。<br>・大けがを負ったときはハナがどうなってしまうのかと思ったが、歩けるようになるまで見守れてよかった。<br>・ハナの生きる力の強さを感じることができた。 | ・ほかのライオンと一緒に暮らせないかもしれないとはどういうことなのかを考えさせながら、山川さんのハナへの思いについて考えさせる。<br>・どんどん回復していくハナの姿を見た山川さんの思いに共感させる。<br>・「見守ってきてよかった」という言葉に込められた、山川さんのハナへの思いについて想起させる。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　人や動植物の生命の強さを感じたことはあるか。それはどんな場面だったか。<br>・今にも枯れそうだった植物に水をあげてみたら復活した。<br>・水がほとんどない砂漠や北極などの冷たい水の中で生きている生き物をテレビで見て生命の強さを感じた。<br>・大けがや病気などに打ち勝って生きている人を見て強いなあと感じた。 | ・人や動植物などの生命の強さを感じた場面について紹介し、話し合わせる。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | ・生命の尊さを話す。 |

小学校中学年　　内容項目　2―(2)

# 電車でのできごと

一　ねらい

相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・都内には、電車、地下鉄、バス、モノレールなど様々な交通機関がある。他の都市に比べても、その種類や数は圧倒的に多い。中でも電車は都内の移動には欠かせない交通機関である。朝夕の通勤時間帯における混雑は、大都市・東京の過密化を示す特徴の一つとなっている。

・本資料では、お使いを頼まれた小学四年生が電車の中で親切にされた自分自身を見つめどんな思いをもったのかを考えることを通して、相手のことを思いやり、進んで親切にしようとする心情を育てていきたい。

三　指導上の留意点と工夫

・導入では、この資料の舞台となっている電車に乗ったときの体験を想起させる。児童の発言を受けながら満員電車の中での出来事に焦点を当て、資料及び価値への導入とする。

・主人公「まさと」の心情を共感的に考えさせる。

・展開後段では、これまで進んで親切にできた経験を振り返らせる。また、その時の気持ちも合わせて想起させるようにする。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　混んでいる電車に乗った時の体験を発表し合う。<br>○　混んでいる電車に乗ったことがあるか。 | ・遠足や校外学習などでの体験も想起させる。 |
| 2　資料「電車でのできごと」を読んで、話し合う。<br>(1) 自分を押しのけて降りようとしたおじさんに対して、まさとはどんな気持ちをもったのか。<br>・自分勝手な人だ。<br>・まわりの人のことを考えて。<br>・乗り過ごしてしまったらどうしよう。<br>・困った。だれか助けてほしい。 | ・おじさんに押し出されてしまい不服に思っているまさとの気持ちに共感させる。 |
| (2) 降りるために道をつくってくれた人に対してまさとはどんな気持ちをもったのか。<br>・降りることができてうれしい。<br>・助かりました。ありがとう。<br>・なんて優しい人たちなんだろう。 | ・周りの人の親切な行為に助けられたまさとの喜びと感謝の気持ちを押さえる。 |
| (3) まわりの人に助けられたまさとは、行きの電車の出来事を思い出しながら何を考えていたのか。<br>・今の自分の立場はさっきのおじさんと同じだった。<br>・おじさんも自分のように困っていたんだ。<br>・道をつくってあげなかった自分は情けない。<br>・困っている人がいたら助けてあげたい。 | ・補助発問や問い返しにより、まさとの思いをより深く考えさせる。<br>・まさとの心情面にしぼって考えさせる。 |
| 3　自分の生活を振り返って話し合う。<br>○　今まで進んで親切にしたことがあるか。それはどんな気持ちからか。<br>・友達が困っているときに助けてあげたくて、親切にした。 | ・どんな気持ちから親切な行為をしたのか振り返らせる。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

小学校中学年　　内容項目　4―(1)

# 山のマナー

一　ねらい

ルールを守り、公共の場所をきれいに使おうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・高尾山は都心に近く、手軽に登山のできる山で、一年を通じて多くの人々が登山を楽しんでいる。また、小学校での遠足などにも利用されている。多くの人々が利用するからこそ、みんなが気持ちよく過ごせる大切な場所として意識付けをさせたいと考える。

・本資料は、親子が高尾山の登山をした際に、ごみ箱がないことに気付くとともに、係の人からごみ箱は撤去されて、ごみは持ち帰るという、今では登山の一般的なルールとなっていることやその経緯について教えられる話である。主人公がごみ問題について考えることを通して、公共の場所を気持ちよく利用するために一人一人が気を付けなければならないことについて考えさせたい。

三　指導上の留意点と工夫

・高尾山のポスターや写真を準備し、導入などで提示することで、児童に資料について関心をもたせる。

・振り返りの場面では、子供たちが普段使用している場所の写真を活用し、公共の場所について意識付けさせる。

・山でごみ拾い活動をしている映像や携わっている人の話などを録画して教師の説話などに活用することも考えられる。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　高尾山の美しい写真を見せ、資料に興味をもつ。<br>○　この山の景色を見てどんなことを感じるか。 | ・高尾山の写真を提示し簡単に説明する。 |
| 2　資料「山のマナー」を読んで、話し合う。<br>(1) お父さんにごみは家まで持ち帰ることを聞いた「ぼく」はどんな気持ちだったか。<br>・どうしてごみ箱がないんだ。<br>・ごみを家に持ち帰るなんてめんどうくさい。<br>・ごみを持ったまま登山するのはいやだな。<br>・ごみをどこかに捨ててしまいたい。 | ・ごみを持ち帰るのが面倒だと思う「ぼく」の気持ちに共感させる。 |
| (2) ビジターセンターの人の話を聞いたとき、「ぼく」はどんなことを考えたか。<br>・ごみを家まで持ち帰らなければならないわけがわかった。<br>・山をきれいにしないと動物たちのすみかがなくなる。<br>・まだまだごみのポイ捨てをする人がいるんだ。<br>・なんとかしないといけないな。 | ・山にごみを捨ててはならないことについて考える。 |
| (3) 落としてしまったあめの袋を拾った「ぼく」はどんなことを考えたか。<br>・みんなが気持ちよく登山をするために、ごみは捨ててはいけない。<br>・山をきれいにするためにもごみを拾わなければいけない。 | ・下山途中にごみを落としたときの「ぼく」の気持ちについて考えさせる。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　みんなが使う場所を大切に使っていただろうか。<br>・みんなが使う公園で食べたおかしのごみをそのままにしてしまったことがある。<br>・みんなが使うことを考えて、行動しないといけないな。 | ・自分たちが普段生活している教室や遊んでいる公園を大切に使っているか振り返らせる。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

小学校高学年　内容項目　1―(6)

## 和也らしい花

一　ねらい

自分が気付いた自分のよいところを積極的に伸ばそうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・東京の発達した交通網や運行時間の正確さ、安全に対する取組などは世界に誇れるものである。この資料は、小さな頃から興味のあった機械と向き合い、安全な運行のために、車両整備に取り組む人の生き生きとした姿を紹介している。このように一人一人が個性を生かし、もてる力を出し合いながら社会生活を支えている。

・本資料では、人はそれぞれ得意とするところ、興味をもつところが違い、その違いを伸ばして生かすことこそが素晴らしいことなのだという道徳的価値について考えさせることができる。人と比べて至らぬところばかりが気になる年頃であるからこそ、自分の中にあるよさに目を向け、伸ばしていこうとする心情を育てたい。

三　指導上の留意点と工夫

・ねらいに対する思いや課題を培うために、児童が個性を光らせ活躍する姿を写真等の記録に残しておき、終末で音楽と共に映像で紹介するとよい。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　自分の特徴を考える。<br>○　自分の「長所」「短所」はどんなところか。 | ・ねらいとする価値に目を向けさせ、自分との関わりで考えられるようにする。 |
| 2　資料「和也らしい花」を読んで、話し合う。<br>(1) 健ちゃんの後ろ姿を見てため息をつく和也の気持ちはどんなものだったか。<br>・自分はだめだな。どうしてうまくできないのだろう。<br>・健ちゃんみたいにできるようになりたいな。<br>・自分の得意なことってどんなことだろう。 | ・自分のよさを見い出せない気持ちについて考えさせる。 |
| (2) 機械のことで友達から頼りにされるようになったときの和也の気持ちはどんなものだったか。<br>・自分にもいいところがあった。<br>・頼りにされるのはうれしい。<br>・運動は苦手だが、得意なことがあってよかった。<br>・もっと、機械のことを勉強したい。 | ・自分の個性が認められ、うれしい、よかっただけではなく、更に伸ばそうとする気持ちについて考えさせる。 |
| (3)「和也らしい花を咲かせたんだね。」と言われたとき、和也はどんなことを思ったか。<br>・健ちゃんにほめられてうれしい。<br>・自分の力が人の役に立ってうれしい。<br>・自分のよさを生かして生きることは素晴らしいことだ。<br>・好きなことを続けてきてよかった。さらに伸ばしたい。 | ・自分の個性を伸ばしていくことについての感じ方・考え方について新たに考えさせ、価値理解を深める。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　どんなところが「自分のよさ」だと思うか。<br>・みんなを楽しませることができる。<br>・だれにでも優しくできる。 | ・自分の個性を伸ばしていくことに対する思いや課題を培えるようにする。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

小学校高学年　　内容項目　4―(1)

# ペットの行方

一　ねらい

法やきまりの大切さを理解し、進んできまりを守ろうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・現在、日本の生物環境を脅かしている「外来種」に関する内容である。現在、日本では法律によって、日本に持ち込むことができない生物を規制し、生態系の維持に努めている。しかし、実際の生活場面では、山や川にペットとして飼うことができなくなった「外来種」を捨てる人が後を絶たない。生活に身近なペットの話題だけに、児童が関心をもって読むことができる。

・本資料は、都立石神井公園を舞台に設定している。石神井公園では、外来種の魚の駆除を行っており、池の近くの看板には、ペットの放し飼いを禁止する言葉を記載している。具体的な場の設定により、児童も身近な問題として捉えやすいと考える。

三　指導上の留意点と工夫

・家族との話合いによって、葛藤する「ぼく」の気持ちを中心として発問し、ねらいとする道徳的価値に迫りたい。

・「生命尊重」や「動物愛護」の価値が含まれているため、ねらいとする道徳的価値に迫るように、法やきまりについて考える主人公の心情を考えさせる。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　写真を見て、「外来種」の存在に関心をもつ。<br>○　これらの魚を知っているか。 | ・児童も見たことのあるブラックバスなどの魚の写真を見せて、資料への導入を図る。 |
| 2　資料「ペットの行方」を読んで、話し合う。<br>(1) インターネットで外来種について調べているとき、「ぼく」はどのようなことを思ったか。<br>・外来種について、初めて知った。<br>・なんでこんなことが起きたのだろう。<br>・外来種が増えたことを、みんなはどう思っているのだろう。<br>(2) 夕食の後、「ぼく」は自分の部屋に戻ってどのようなことを考えたか。<br>・理由があるにせよ、きまりを守らないのはいけないことだ。<br>・飼い主は最後まで面倒みないと無責任だ。<br>・分かってはいるけれど、悩んでしまう。<br>・生き物を捨てるとは自分勝手だ。<br>(3) 日曜日、石神井公園の池をずっと見つめていた「ぼく」は、どのようなことを考えたか。<br>・みんなが、なぜペットを放さないというきまりができたのか、考えないといけない。<br>・捨てる人がいるからきまりができた。<br>・飼い主は責任を果たすべきだ。<br>・どんな理由があろうときまりは守るべきだ。 | ・好きなものを飼う権利と育てる責任について考えさせる。<br>・「ぼく」に共感し、飼えない事情と起きている問題との間で葛藤する気持ちについて考えさせる。<br>・実際に近隣の公園の写真を掲示することによって、自分との関わりで考えやすくする。<br>・きまりの意義を考えさせるとともに、自分の都合を優先させないといった規範意識の大切さを意識させるようにする。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　自分の都合を抑えて、法やきまりをすすんで守ったことがあるか。 | ・場面や対象を広げてから考えさせる。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

小学校高学年　　内容項目　4―(4)

# 東京マラソンのボランティア

一　ねらい

社会に奉仕する喜びを知り、公共のために尽くそうとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・東京マラソンは東京を代表する大きな行事として知られている。最近のマラソン人気に伴い、参加者の数も増えている。そうした中で東京マラソンを支えるボランティアの人数も年々増加し、その数は一万人を超える。多くのボランティアによって成り立つこの行事は、勤労奉仕の喜びを体験できる場でもあり、公共のために尽くそうとする心情を育てる効果が期待できる。

・主人公が自分の働きが人のためになっていると実感することを通して、公のために働く喜びを知っていく。どのようなことを感じ、考え、公のために働く喜びを知っていくのか、主人公に対する共感をもとに考えさせ、ねらいに迫りたい。

三　指導上の留意点と工夫

・ボランティアを行うことができる年齢は決まっている。本資料の主人公の利男は高校生ではあるが、利男の思いに共感し、考えることができるであろう。

・話の内容では、お守りを拾うことから、「思いやり」といった道徳的価値と関連がある。人の喜びが自分の働く喜びになることについて考えさせたい。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　東京マラソンについて知っていることを伝え合い、資料に興味をもつ。<br>○　東京マラソンを知っているか。 | ・実際の写真を用意し、大会の裏ではたくさんのボランティアが働いていることを知らせ、資料への導入を図る。 |
| 2　資料「東京マラソンのボランティア」を読んで、話し合う。<br>(1) 利男は、当日の朝、どのようなことを思ったか。<br>・うまくできるかな。<br>・どんな人と出会うのかな。<br>・自分が走るのではないから、面倒だ。<br>(2) ランナーに気持ちを込めて声をかけられるようになったのはなぜか。<br>・みんながんばっているから。<br>・ありがとうと言われて、やる気になってきたから。<br>・自分のしていることが人の役に立っていると感じたから。<br>・人を励ますことができたから。<br>(3) 高島さんと帰りながら、来年もボランティアをしようと思ったのは、どのような気持ちからか。<br>・自分も人のために何かできてうれしい。<br>・人が喜んでくれると自分もうれしい。<br>・自分も東京マラソンの役に立つことができた。<br>・みんなのために自分が精一杯できることは素晴らしいから、またその喜びを感じたいから。 | ・利男に共感し、人のために勤労・奉仕をしようとする気持ちの難しさについて考え、人間理解を深めさせる。<br>・水を渡すことを通した様々な人との関わりから働く意識が芽生えたことを押さえる。<br>・利男の気持ちが充実していったことについて、話し合わせる。<br>・補助発問として、人のために働く喜びを感じている友達の心情を聞き、勤労について考えを深めさせる。<br>・ボランティアを終えた達成感について触れる。<br>・照れくさい気持ちの他に、人のために働くことの大切さや気持ち良さに気付かせる。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　人のために進んで仕事をしたことはあるか。 | ・ワークシートを用意し、十分時間をとり、振り返らせる。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

小学校高学年　　内容項目　3―(1)

# 気をつけるのよ

一　ねらい

生命がかけがえのないものであることを知り、自他の生命を尊重しようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・東京都では、東京発医療改革の具体策の一つとして、救急医療体制充実のために東京ＥＲが開設されている。東京ＥＲとは、救急患者への医療を三百六十五日二十四時間、施す救急医療施設である。その中には救命救急センターが設置されている。本資料は、救命救急センターに運ばれ、胎児が生命を取り留め無事に出産される話が題材となっている。

・主人公である信行は日常生活の中で、自分の生命があることを当たり前のように感じ過ごしていた。そんなときに、救命救急センターの医師の話を聞くことになる。医師をはじめ多くの人の支えの中で生命の危機を乗り越え無事に出産を迎えることができた妊婦さんの話から、誕生の素晴らしさや生命の尊さに気付く。そして、生命を大切にしていこうとする姿勢に変容していく。この主人公の気持ちを考えさせながら、自他の生命を尊重していこうとする心情を育みたい。

三　指導上の留意点と工夫

・自分の生活を振り返る場面では、時間を十分に取り、大切に扱う。自分や他人の生命を大事にするとはどういうことだと思うか、特別な出来事に限らず、日常生活の中から考えさせるようにしたい。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　生命とはどんなものであるかについて話し合う。<br>○　生命とはどんなものか。 | ・ねらいとする価値への方向付けをする。 |
| 2　資料「気をつけるのよ」を読んで、話し合う。<br>(1) ふてくされながら自転車をこぎ出したときの信行の心の中はどうだったか。<br>・うるさいな。もうわかっているよ。<br>・わざわざ大きな声で言わなくてもいいのに。<br>(2) 「元気でいられることも決して当たり前ではない。」という川口さんの言葉を聞いて、信行はどんなことを考えたか。<br>・生命があることを当たり前だと思っていた。<br>・生命があることに、感謝が足りなかった。<br>・生命があるのは、多くの人のおかげなんだ。<br>(3) どんな気持ちで信行は「お母さん、いつもありがとう。」と言ったのか。<br>・ぼくの生命をいつも大切に思ってくれてありがとう。<br>・ここまで大切に産み育ててくれてありがとう。<br>・かけがえのない生命を大切にしていくからね。<br>・サッカーができるのも生命があるからだね。精一杯頑張るからね。 | ・母親の言葉の意味や思いを深く考えずにいる信行の心情を押さえる。<br>・自分の生命があり、元気に過ごしていることは当たり前ではなかったということに気付いたときの信行の多様な思いを引き出すようにする。<br>・信行の気持ちに共感し、自分の生命があることに感謝をしたり、生命を大切にしていこうとしたりする気持ちについて、考えを深めさせる。<br>・交通安全のみにとどまることなく考えを広げさせるようにする。 |
| 3　自分の生活を振り返る。<br>○　生命を大切にするとは、どういうことだと思うか。<br>・力いっぱい生きることだと思う。<br>・自分の生命だけではなく、他の人の生命も大切にすることだと思う。 | ・ワークシートを用いて振り返らせる。<br>・自他の生命について考えさせるようにする。 |
| 4　教師の説話を聞く。 | |

中学校　　内容項目　4―(5)

# 江戸切子への道

## 一　ねらい

勤労の尊さや意義を理解し、勤労を通して社会の発展に尽くそうとする態度を育てる。

## 二　資料選定の理由

・本資料は、中学校を卒業後、江戸切子職人の道を選んだ主人公が、勤労を通して働く喜びや生きがいを味わう姿が描かれている。自分の特技を生かして生きていく主人公の姿に着目させることで、勤労を通して社会の発展に尽くすことの大切さを考えさせたい。

・中学生の時期は、自らの進路や職業について真剣に考える時期になる。本資料の主人公の職人としての誇りや生きがいについて考えさせることを通して、勤労の尊さや意義について理解させるようにしたい。

## 三　指導上の留意点と工夫

・特別活動における進路指導との関連も考え、相互補完できるよう、道徳の授業では生徒の内面を深める指導に重点をおきたい。

・個人の利益だけではなく、自己の技術や能力を生かしながら、社会の発展に尽くそうとする大切さについて考えさせるようにする。

・展開では、勤労の意義について深く考える主人公の姿に共感させるようにする。

## 四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　将来の自分の職業について考えを発表させる。<br>○　将来の自分の職業をどのように選択するか。 | ・どんなことで職業を選択するか考え、資料への導入を図る。 |
| 2　資料「江戸切子への道」を読んで、話し合う。<br>(1) 中学卒業後、江戸切子の道を選んだ横井はどんな気持ちだったか。<br>・兄に迷惑をかけたくない。<br>・自分の特技を生かして、早く一人前になりたい。<br>(2) 江戸切子職人として修行していたときの横井はどんな気持ちだったか。<br>・単純作業ばかりで嫌だ。休みもほしい。<br>・兄弟子のようにやりがいのある仕事がしたい。<br>・いつになったら、江戸切子のカットの仕事ができるのだろう。<br>・修行はつらいが、職人としての師匠にあこがれる。<br>(3) 独立した後、お客さんからクレームが寄せられたときの横井はどんな気持ちだったか。<br>・職人としての気のゆるみがあった。<br>・忙しさを理由に、師匠の職人魂を忘れていた。<br>・江戸切子はカットが命なのに油断していた。<br>・お客さんの立場に立った仕事をしていなかった。 | ・状況を考え、江戸切子の職業を選択した主人公の気持ちに共感させる。<br><br>・弟子入りして間もない頃、修行のつらさから不満を抱く主人公に共感させながらも、弟子として頑張ろうとする主人公の気持ちを考えさせ、ねらいに迫るようにしていきたい。<br>・「お客さんのために」という師匠の心情を受け継ぐとはどのようなことか、深く考えさせる。 |
| 3　勤労の意義や尊さについて考える。<br>○　やりがいをもって仕事をするということはどういうことか。<br>・自分の特技を生かし、そのことが世の中に役立っていくこと。<br>・家族のために働くこと、誇りがもてる職業であること。<br>・仕事を通して社会の発展のために尽くすこと。 | ・お互いに考えを発表し合う。<br>・「何のために働くのか」ということを考えさせ、社会に貢献するとはどういうことかを理解させる。 |
| 4　教師の説話を聞く。<br>・職業選択の際の悩みや努力、教師としての職業観について話す。 | ・教師自身の職業観を語り、勤労の尊さと意義について理解させる。 |

中学校　　内容項目　4―(1)

## 誰のために……

一　ねらい

法やきまりの意義を理解し、社会の秩序と規律を高める心情を育てる。

二　資料選定の理由

・規範意識の低下が社会問題として取り上げられてからかなり経つが、規範意識の向上を図るのはなかなか難しい現状もある。

・本資料は、生徒にとって身近な話題を取り上げ、登場人物の心情を考えることで、法やきまりの意義に対する意識を高めることができる。

三　指導上の留意点と工夫

・資料の内容が、身近に起こりうる内容のため、過去の事実を取り上げるなどによって、道徳の授業が生活指導の場とならないように配慮する必要がある。そのために、あくまでも資料の中で様々な角度から登場人物の心情を考えさせたい。

・社会生活、学校生活、集団生活におけるきまりの意義についてグループ討議をするなど、きまりに対する個々の考えを発表する場を設け、法やきまりに対する意識を向上させる。

・授業後の学級活動や学校行事において、きまりの検討などをする際に、道徳の授業で確認したきまりの意義などを取り上げることもできる。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　交通ルールにはどのようなものがあるかを発表する。<br>○　交通ルールにはどのようなものがあるか。 | ・様々なルールをいくつか自由に発表させる。 |
| 2　資料「誰のために……」を読んで、話し合う。<br>(1) 達也が、佐知子に「誰にも迷惑かけてないのかな」と言われたときの気持ちを考えてみよう。<br>・いちいちうるさいなあ。<br>・信号無視が悪いのは分かっているのに。<br>(2) 警察の人の最後の言葉を聞いて達也はどんな気持ちになったのか。<br>・交通ルールを守らないといけないことは分かっているけれど、守れないことだってあるよな。<br>(3) 達也が、男の子の声にドキッとしたのはなぜか。<br>・小さな子に何か言われるとは思っていなかったから。<br>・誰かに見られていることを自覚させられたから。<br>(4) 達也は、自分の部屋で「誰にも迷惑かけていない」と言った言葉について考えているとき、どんな思いになっていたのか。<br>・やっぱりきまりは守らないといけない。<br>・誰かに迷惑をかけるから決まりを守るのではない。<br>・社会の一員としてきまりは守らないといけない。 | ・達也の心情の変化に注目して授業を展開する。<br>・達也の規範意識の低さを確認できるとよい。<br>・達也が今までの考えに違和感をもち始めたことに気付かせる。<br>・達也が信号無視に対して後ろめたさを感じ始めたことに注目させる。<br>・達也の心境をあらゆる方面から考えて、多くの意見を引き出すようにする。 |
| 3　きまりの意義を確認し、規律の向上について考える。<br>○　社会や学校におけるきまりの意義は何か、そして規律を高めるためにどうするべきか。 | ・きまりの意義の確認だけにとどまらず、規範意識の向上までつなげたい。 |
| 4　教師の説話を聞く。<br>・社会生活や集団生活におけるきまりの意義やそれを守ることの大切さについて話す。 | ・きまりを守ることは、社会生活、集団生活において、そこに所属する人にとっての義務であることを伝えたい。 |

中学校　　内容項目　1―(5)

## 土器のかけら

一　ねらい

自己理解を深めつつ、自分らしさを伸ばしていこうとする態度を育てる。

二　資料選定の理由

・中学一年生の時期は、自己を理解したり、自分なりの生き方とは何かということについて考えたりするようになる。その一方で、自分の姿を自らの基準に照らして考えたり、他と比較したりして、その至らなさに悩むこともある。成長期のこの時期に、人との出会いにより、充実した人間としての生き方についての自覚を深め、自分自身のよさや個性を見出していこうとする態度を育てたい。

・本資料は、好きなことには地道に最後まで取り組むのだが、希望した調査の手伝いに途中で挫折しそうになる主人公の姿が描かれている。横山先生との出会いにより、自分を見つめ、自分らしさを将来につなげていく主人公の変容に着目することで、個性を伸ばして生きることの大切さを考えさせたい。

三　指導上の留意点と工夫

・横山先生のひと言から、自分を見つめ、自分らしさに気付き、それを伸ばして生きることの大切さを考えさせるようにしたい。

・資料後半の発掘調査の場面を通して、内容項目1―(4)として理想の実現を目指して自己の人生を切り開いていく態度を育てることもできる。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　「今、熱中しているもの」について考える。<br>○　熱中したり、夢中になっているものがあるか。それはなぜか。 | ・日常生活での出来事を想起させながら、展開に導くための雰囲気をつくる。 |
| 2　資料「土器のかけら」を読んで、話し合う。<br>(1) 部活動に入らなくてもいいと思ったのはなぜか。<br>・何をやってもだめだろうと思ったから。<br>・自信がなくなり、自暴自棄になったから。<br>(2) 歴史研究部に入ろうと思ったのは、なぜか。<br>・横山先生なら、自分のことをよく理解してくれると思ったから。<br>・部活動に入って何かに打ち込んでみたいという気持ちがあったから。<br>(3) 横山先生の言った「見えてくるもの」とは何か。<br>・根気強く取り組んだ後に得られる感動。<br>・自分らしさへの気付き。<br>・自分の得意なことを生かして、生きることの大切さ。 | ・思い通りにいかないことで、現実から目をそらそうとしている主人公の心情に気付かせる。<br>・自分を理解してくれる横山先生との出会いから、主人公の自分らしい充実した中学校生活への期待があることに気付かせる。<br>・発掘調査への参加を通して、自分らしさに気付き、それを発揮することの価値に共感させる。 |
| 3　「心のノート」を活用して、自分らしさについて考える。<br>○　どうしたら、自分らしさが発揮できるのか。<br>・ちょっとした磨きを加えることで、自分らしさが輝き出す。<br>・自分らしさを知ることが、よりよい生き方につながっていく。 | ・自分のもっているいろいろな特徴や可能性を前向きに捉え、よりよい生き方につなげる。 |
| 4　教師の説話を聞く。<br>・自分らしさに気付き、個性を伸ばすことが充実した生き方につながることを話す。 | ・自己受容や自己理解に努めることで、個性を伸ばすことができることに気付かせる。 |

中学校　　内容項目　3―(1)

# お父さんの思い

一　ねらい

生命の尊さを理解し、精一杯生きようとする心情を育てる。

二　資料選定の理由

・本資料は、病と闘いながら、娘の誕生日のプレゼントとする絵を描いた父の姿が描かれている。父にとって、絵を描くことは『生きた証』となり、生きる希望になった。また、主人公の朋子が、父の絵に込められたメッセージを受け取り、精一杯生きていこうとする様子も描かれている。本資料を活用することによって、生命の有限性・連続性と尊さ、精一杯生きることが、生命を輝かせることにつながるということを生徒に考えさせたい。

三　指導上の留意点と工夫

・本資料を効果的に活用するポイントは、死を目前にした父が、絵を自分の『生きた証』と捉え、最後の生きる力をかけた思いを追求させることである。生命が有限だからこそ、精一杯生きようとし、精一杯生きることが生命に輝きをもたらすことを感得させたい。

・また、主人公が父の思いを受け止めて、自分の生命を輝かせようとする思いに共感させることによって、「精一杯生きよう」という気持ちをふくらませたい。

・父と主人公との交流に焦点を当てて「家族愛」で扱うこともできる。

四　展開例

| 指導の意図・学習活動 | 指導上の留意点 |
|---|---|
| 1　東京スカイツリーについて知る。<br>○　東京スカイツリーについて知っていることがあるか。それはどんなことか。 | ・東京スカイツリーについて知り、資料への導入を図る。<br>・写真などを提示する。 |
| 2　資料「お父さんの思い」を読んで、話し合う。<br>(1) 練習試合があると言って、見舞いに行くのを断った朋子をどう思うか。<br>・部活の練習試合を優先させてもこの場合は仕方がない。<br>・お父さんの調子がよさそうなので、油断した。<br>・お父さんが重病なのは気がついているはずなのに、部活に行くのはどうかと思う。 | ・見舞いに行かなかった朋子の行動の是非を理由を付けて考えさせることによって、朋子が生命の重みをつかみきれていないことに気付かせる。<br>・「朋子は、お父さんの病気が重病だと気が付いていたのか」といった補助発問をし、考えさせる。 |
| (2) どうして父にとって絵を描くことが、自分の『生きた証』になるのか。<br>・今できるすべてを絵に込めようとしたから。<br>・最後まで生きる希望になったから。<br>・朋子のためにも、朋子への思いや自分の頑張りを絵という形に残したかったから。 | ・絵に込められた父の思いを追求することによって、生命の有限性と、有限だからこそ精一杯、生命を輝かせようとすることの大切さに気付かせる。 |
| (3)（私も頑張ってるよ。）と心の中でつぶやいた時、朋子はどんな気持ちだったのか。<br>・私もお父さんのように精一杯生きるからね。<br>・お父さん、私の頑張りを見ていてね。そして応援してね。 | ・父の遺志を受け継いで、精一杯生きようとする朋子の心情に迫り、生命の連続性に気付かせたい。 |
| 3　自分とのかかわりで考える。<br>○　「精一杯に生きる」とはどのようなことか。<br>・一日一日を大切にする。<br>・夢や希望をもって生きる。<br>・今できることを一生懸命にやる。 | ・精一杯生きることが、生命を輝かせることになることを、自分の問題として考えさせる。 |
| 4　教師の説話を聞く。<br>・生命の尊さや、精一杯生きようとすることの価値について話す。 | ・教師自身が自らの経験を語り、生命の尊さについて理解させる。 |

## 作　成　協　力　者

（職名は平成２３年３月現在）

《 東京都道徳教育読み物資料集 》

平成２２年度　道徳授業地区公開講座推進委員会

【小 学 校】

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 朝　倉　喩美子 | 練馬区立光和小学校長 |
| 委　員 | 武　田　　淳 | 中野区立中野神明小学校主幹教諭 |
| | 安　倍　　威 | 府中市立府中第十小学校主幹教諭 |
| | 鈴　木　裕　子 | 町田市立忠生第一小学校主幹教諭 |
| | 橋　本　ひろみ | 世田谷区立池之上小学校主任教諭 |
| | 茂　呂　佳　江 | 江戸川区立下鎌田西小学校主任教諭 |
| | 山　西　香　織 | 文京区立窪町小学校教諭 |
| | 遠　藤　信　幸 | 足立区立弘道第一小学校教諭 |

【中 学 校】

| | | |
|---|---|---|
| 委員長 | 坂　口　幸　恵 | 江戸川区立平井第二小学校長 |
| 委　員 | 菅　野　由紀子 | 東久留米市立久留米中学校副校長 |
| | 小　貝　　宏 | 江戸川区立南葛西第二中学校主任教諭 |
| | 篠　塚　浩　幸 | 多摩市立青陵中学校主任教諭 |

なお，東京都教育委員会においては，次の者が本書の編集に当たった。

| | | |
|---|---|---|
| 伊　東　　哲 | 教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課長 | |
| 相　原　雄　三 | 教育庁指導部主任指導主事 | |
| 岩　﨑　治　彦 | 教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課統括指導主事 | |
| 前　田　　元 | 同 | 指導主事 |
| 松　永　かおり | 同 | 指導主事 |
| 阿　部　大　介 | 同 | 指導主事 |
| 藤　村　真　理 | 同 | 課務担当係長 |

小・中学校　東京都道徳教育読み物資料集

東京都教育委員会印刷者登録
平成２２年度　　第２４０号

平成２３年３月２９日
編集・発行　　東京都教育庁指導部義務教育特別支援教育指導課
所 在 地　　東京都新宿区西新宿２－８－１
電話番号　　（０３）５３２０－６８４１
印刷会社　　前田印刷株式会社

石油系溶剤を含まないインキを使用しています。